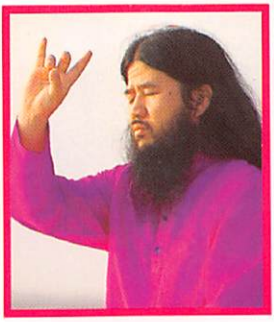
神通力者への道5



人間から神へ生まれ変わった
麻原尊師の愛弟子たち

AUM PRES

神通力者への道 5

※人間から神へ生まれ変わった麻原尊師の愛弟子たち

AUM PRESS

はじめに

「へぇー、世の中にはこういう世界もあるんだなあ……！」

あなたが本書を読み終えたならば、きっと、こんな新鮮な驚きを感じられることだろう。麻原彰晃尊師の指導のもとで厳しい修行を乗り越えて、「クンダリニー・ヨーガ」の成就を果たし、神通力者となった人たちの織りなすミラクルワールド。彼らが発揮する神通力は、まるで神話か伝説の中での話のように見えるに違いない。

空中に浮揚したり高い世界へ飛んだりする「神足通」。神々の声を聞いたり、遠くの音を聞いたりする「天耳通」。他人の心を見抜く「他心通」。前生を知る「宿命通」。転生先を知ったり、生きながらにしていろいろな世界とつながる「死

生智」……。

人間をはるかに超える能力の数々。確かに彼らは人間を超えている。しかし、彼らとて最初から神通力者だったわけではない。以前は普通の人だった。そう、嫌悪や性欲、食欲、プライド、嫉妬などの煩悩に悩み苦しんでいた、ごく普通の人だった。そんな彼らを〝神の境地〟に導いたのは、他ならぬ修行の力である。そして修行とは、個々人の適性を見抜く正しい指導者、つまり麻原彰晃尊師のもとでなら、だれにでも可能なものなのだ。

この地球という同じ世界に住んでいながら、一方では煩悩に翻弄されて平凡な人生を送る人々がおり、一方では修行によって神の境地に達する希有な人々がいる。修行というものがだれにでも可能であることを考えると、この両者の運命を決定的に分かつものは、「法縁」以外にない。本書に登場する神通力者たちの軌跡を見ていただきたい。彼らは最初ふとした法縁でオウム真理教の書籍と出合い、高い世界への興味を抱き、修行の道へ小さな一歩を踏み出した。しかしそれは、

平凡な人生との決別を告げる大きな一歩となったのだ。

本書を手に取られたあなたが、彼らと同じようにこの「法縁」を活かし、修行の道へ小さな一歩を踏み出されることを期待したい。絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜の世界へと向けて……。

一九九三年八月　AUM PRESS

※なお、本書に書かれている内容をもっと深く理解されたい方は、次の本を参照していただきたい。

『生死を超える・増補改訂版』『イニシエーション』
『マハーヤーナ・スートラ』『タターガタ・アビダンマ』第一誦品～第二誦品
『超越神力』PART1～PART3
（いずれもオウム出版・真理の御魂　最聖　麻原彰晃尊師著）

神通力者への道・5

❖人間から神へ生まれ変わった麻原尊師の愛弟子たち

はじめに——3

貪りとの死闘——帰依しかない！——9
聖者ヴァジラ・アナーサカ化身成就正師

グルいればこそ
聖者ウッティヤ到達光正師 73

ただ一つの道を
聖者タントラディンナー到達光正師 97

〝逆境〟に導かれて
聖者ナーギタ到達光正師 121

貪りとの死闘——帰依しかない！

聖者ヴァジラ・アナーサカ化身成就正師

◉酸素濃度九・七七パーセント

酸素濃度計は、刻一刻と酸素の減少を告げていた。十三、十二、十一。四日目にはついに十パーセント代に落ち込んだ。空気中の酸素濃度と肉体の症状の関係について、医学的には次のようなデータがある。

一二％＝筋けいれん、呼吸困難

一〇％＝顔面蒼白、意識不明、けいれん

八％＝昏睡、八分で死亡

ただし、このデータは二酸化炭素の影響が考えられていない。つまり、地中で外気を完全に遮断された瞑想室の場合、肉体的な影響はそれ以上に危険なものとなるのだ。加えて、五日間の断水断食状態、暗闇の中といった環境での精神的なストレス等を考えると、通常の医学的データでは計り知れない異変や恐怖があっても不思議ではない。

聖者ヴァジラ・アナーサカ化身成就正師のアンダーグラウンド・エアータイト・

サマディは、全くのアクシデントであった。急きょ決まったサマディのため、地中に埋められた瞑想室の事前の換気が十分ではなく、スタート前から二酸化炭素が多く、酸素が減りやすい条件となっていたのだ。さらに、通常のチェンバーの温度よりも十度近くも低く、内部の温度調節は全期間を通じてうまくいかなかったため、体を温めるためにより酸素を消費しなければならなかった。

しかし、正師は、この空間の中で平然と五日間の瞑想修行を成し遂げた。

「大丈夫ですか？　今どうですか？　どういう状態ですか？」

と、インターホンを通じて何度も確認の連絡が入るのが不思議にさえ思えたという。

「前回よりも調子が良く、蓮華座も組み替えはしましたけれど、五日間全く痛みもなく組み続けることができたんですね。アパーナ気も撤退していて、非常にいい状態だったんです。『これはいいぞ。酸素消費量もそんなに悪くないんじゃないか』と期待していたくらいなんです。」

と、正師は笑う。

最終的に、酸素濃度は九・七七パーセントまで下がった。さすがに普通の呼吸ではなく、ヴァヤヴィヤ・クンバカの入出息のような呼吸になったようだが、常識から考えるとやはり驚異としかいいようがない。

チェンバーを出た正師は、尊師からクンダリニー・ヨーガの解脱者と認められた。三月十日であった。授かったホーリー・ネーム「ヴァジラ・アナーサカ」は「絶対に壊れることのない断食者」という意味である。極厳修行中、何度も過酷な断水断食をし、危険なアンダーグラウンド・エアータイト・サマディを乗り越えた、その不屈の意志の力にふさわしい祝福名だ。

しかし、それまでの解脱者が紆余曲折を経て、その境地を獲得していったように、彼の道のりも決して平坦なものではなかった。その自己との厳しい闘いは、わたしたちに多くの教訓を与えてくれるものである。

◉断食の反動

修行場を抜け出し、一気に食堂に駆け込む。

（尊師からも許可が出ているんだ。）

そんな気持ちも手伝って、食事に手が伸びる。九日間の断水断食の直後のことである。普通ならば、胃腸の働きが完全に止まってしまっているため、大量に食物を放り込んだら命を落とすおそれもある。しかし、心は貪りに支配されており、しかも修行によって消化の炎も猛烈に強くなっていた。

結局その日は三、四回隠れ食いという感じで、合計にしてご飯十杯以上も食べた。断水断食の反動は自分でも驚くほどすごかった。

（貪りが出ているときはいくらでも入るんだな。）

しかし、それを「証智が進んだ」と喜ぶことはできなかった。目の前にある解脱という目標を思うと、超え難い自己のカルマを痛切に感じざるを得ない。そして、過去に修習した自己の行ないの一つ一つが正師の心に重く甦ってくるのだった。

◉宗教心はあるものの……

わたしは生まれたときからS学会に入っていたという、生まれつきの外道でした。親が非常に熱心な会員で、その影響でわたしも幼少のころからある程度の活動をしていたんです。これは二十歳くらいまで続けました。

そのS学会をやめたきっかけというのは、教義に対する不信です。何を質問しても「それは信心が足りない」とか、「まだまだ求道心が足りない」というような曖昧な答えばかりで、きちんとした教義にのっとった答えではないんですね。それに満足できず、やめることにしたんです。

中学を卒業後、定時制高校に通いながら、わたしは料理の関係の仕事をずっと続けてきました。いわゆる水商売ですね。レストランに始まって、居酒屋ですとか、クラブ、パブといったところでの仕事を一通り経験しています。

その中で、ある同業者と知り合ったことから、再び、外道に入ってしまうことになります。実はその人は、自分で考案した修行をしている人だったんです。一

定期間山に入って修行し、また現世に帰ってきて、仕事を多少しながら自己流の修行をするという人で、今から思えば魔境的だったと思います。それでもいろいろな光を見るとか、人の心を読むとか、多少の神通は持っていたんですね。

そういう、修行や神通にひかれてしまって、自然に仲良くなり、それからずっとついていったわけです。それが二十一歳のころから七年くらい続いたわけなんですね。まあ、弟子になってしまったようなものです。その人に対して、お布施というか、授業料を払っていたんですが、それが七年間で合計一千万円くらいにはなると思います。

やはり料理人であったその師匠から得られたものは、「ある程度の料理の知識と、料理の修習、味覚の修習、貪りの修習。あとは現世的な処世術」だったと正師は言う。修行といっても、滝行と「日々の心の実践」という程度のものしかなく、その「心の実践」自体が愛や慈悲といった言葉を使いながらも、その実、貪

りを背景にしたものだった。

間違ったグルに布施をすれば、当然そのカルマを受けなければならない。自己流の修行の怖さを感じさせるエピソードである。

この料理関係の仕事の修習、そして魔境的なグルとの関係、それが後に正師の修行の足を大きく引っ張ることになったのである。しかし、そのグルがきっかけとなって真理と巡り合うことになるのだから、運命とはわからないものである。

◉外道の師匠に紹介されて

そんなことを淡々とやっていたんですが、その人は自分ではあまり力がないので、「これはいい」「あれはいいぞ」と、いろんな人の本を渡してくれるようになりました。その中に一冊、

「これに書かれていることはいいことだ。この人だけは本物だ。」

と、手渡された本があったんです。それが、麻原尊師が最初に書かれた『超能力

秘密の開発法』だったわけです。

この本を読み始めたら、尊師に夢中になってしまいました。まず、空中浮揚の話とか、いろいろと超能力について書かれていますよね。それに対して非常に興味がありまして。

それから、わたしは実際の行法はほとんどやったことがなかったんですけれども、その本に書いてあるアーサナを毎日やってみたんですね。すると、どんどん気持ちいい状態になっていきました。やったすぐその場から結果が出てきたので、これは本格的にやってみたいと思ったんです。

それはちょうど、その人に矛盾が多く、自分で納得できないことを不満に思い始めていたころでした。それで、なんとかして尊師に会いたいという思いが非常に強くなったんですね。結局、七年ぐらい師事していた師匠に、「麻原尊師のところに行きたい」ということを正直に告げたんです。

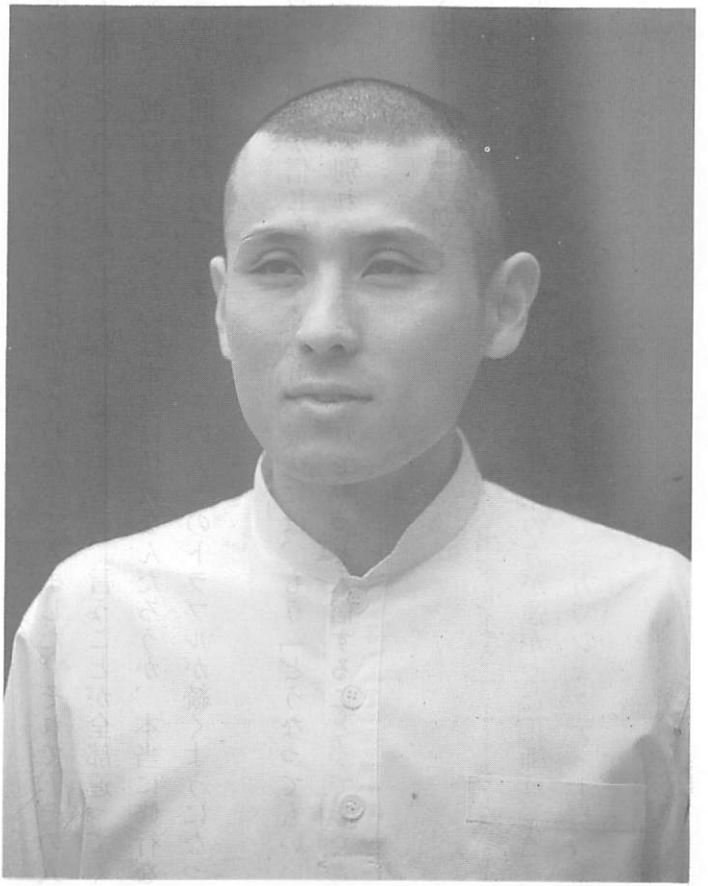
ところが逆に引き止められて、結局行けない状況に追いやられてしまいました。

それからも引き続いて八カ月間ほど、その人に授業料として給料をほとんど渡すことになってしまったんです。自分で持っているのは残り六万円くらいで、その中から家賃、食費を引くとほとんど残らないわけです。だから、入信費用がないんですね。それで悶々と八カ月くらい経ちました。

その間、ずっと「絶対にオウムに行くんだ」と思念していました。すると、尊師を強く意識していたので、なんとそれだけでアストラルが浄化されてきてしまったんですね。例えば寝ていても、わけのわからない涙が出てくるというような経験を何度もしました。実はこれは、心がだんだん綺麗になっていくときの涙なんですけれども。

その一方で、『超能力秘密の開発法』以外にも、尊師のご著書が出版される度に、次々と読んでいきました。すると、いろいろな教義が出てきますよね。その教義が非常に信じられるんです。それで、尊師に対する確信というものが培われてきたように思います。逆に、オウム真理教の教義を知るにつれ、今までの師匠

貪りとの死闘——帰依しかない



が非常にいいかげんであることがよくわかってきました。それで、その人にいろいろと質問していったわけですね。そうすると、言うことが全部違ってくるんです。それで、彼の言っているのは本当に仏教なんだろうか、本当に修行なんだろうかという疑問がわいてきまして、その人とのトラブルが続くようになったんです。

結局、その人が信じられなくなり、最後には、もう「どうなってもいい」という感じで、ケンカ別れをしました。それでやっと入信することができたんです。

◉すぐ出家！　のはずが……

「シャクティーパットを一回受けたら、即、出家しよう」――もともと、現世より宗教や神秘的な世界、救済に対する興味の方が強かった正師は、そう考えていた。出家希望を伝える作文を早々に提出し、一方でシャクティーパットを受けるためにせっせと深夜コースに通った。

そして、作文提出後二カ月ほどして、尊師から「いつでも出家していい」という許可が出た。シャクティーパットを受けたときにも、「いつ出家しますか」とミラレパ正悟師にも声をかけられた。すべては順調に進むかと思われた。だが、正師はここで意外な遠回りをしなければならなくなる。

シャクティーパットを受けたころから、今までの徳がなくなってしまい、現世に流されてしまったんですね。いったん切れたはずの外道にまた引きずられてしまったんです。というのは、以前の師匠に、

「出家したらもう会えないから、最後の旅行に行こう。」

と誘われて、まんまとそれに乗ってしまったんですね。

入信してすぐ酒もタバコもやめていて、それは三カ月くらい続いていました。ところが、その人と一緒に出かけたがために禁酒禁煙が破られてしまったんです。

「もう最後なんだから、一杯飲もうじゃないか。」

と言われて、一杯が二杯、三杯……。タバコも、意志の力で無理にやめていただけでした。ですから、目の前でパカパカ吸われてしまうと、また吸いたくなってしまって。結局、現世に流されてしまったんですね。それで、なかなか出家できなくなってしまったんです。

さらに、二、三カ月経ったころから、だんだん卑屈になってきてしまいました。自分は出家しようと思ったのに禁酒禁煙すら守れなかった、ということから卑屈になってしまい、現世に心が向かってしまったんです。それで、だんだん道場に通えなくなってしまったんですね。道場に行けば、また出家のことを言われます。それで、だんだん行きづらくなってしまって。会費も、一カ月遅れ、二カ月遅れ、三カ月遅れになってしまいました。まあ、そんな感じで、やっているかやっていないかわからないような、全く活動していない信徒になり、道場にも全く行かなくなったんです。

その間に、以前の師匠にあの手この手で引っ張られました。例えば、

「富士山が爆発するぞ。この辺も危険だ。今こういう状況では助からない。」というような予言を聞かされて、またそちらの方に振り回されたり。以前のようにべったりの関係ではなく、つかず離れずでいたんですけれども。

会費だけ払って道場にも行かないという状態で、そのまま約二年が過ぎていってしまいました。

◉出家の夢、再び

「尊師のシークレット・ヨーガがあるんですが、受けませんか?」

正師のもとにそんな電話がかかってきたのは、真理との縁も薄らぎ、出家の夢も消えかかったかに見えたある日のことであった。この一本の電話が再び正師と真理との縁を取り持つこととなった。

そのシークレット・ヨーガでは、悩みを相談する代わりに、以前から強く印象

に残っていた四つほどのヴィジョンについて、尊師にお伺いしました。すると、

「これは出家のヴィジョンだ。」

と、いきなり出家するように言われてしまったんです。確かに、以前は出家する直前まで行ったくらいですから、いずれ現世を断念して出家しようかな、と思ってはいました。けれども、こんなに急にまた出家ということになるとは思っていなかったので、驚いてしまいました。非常にとまどっていたんです、表層意識では。

ところが、わたしの真我というか、潜在意識というか、心の奥底ではそれを非常に喜んでいまして、歓喜状態になって、実際に体が震えるほどになってしまいました。頭頂、サハスラーラがズキンズキンして、エネルギーが上がりっ放しになってしまったんですね。そのシークレット・ヨーガの後で尊師の説法があったわけですけれども、その説法も耳に入らないくらい、一時間ずっと歓喜の状態だったんです。

正師の出家に関しては、もう一つエピソードがある。時はまさにオウム・バッシングの真っただ中で、オウム真理教に関する根も葉もない中傷記事が出回っていたころであった。

当然のごとく猛反対する両親を正師は粘り強く説得した。正師の真面目さ、誠実さがうかがわれる。

「こんなにひどい宗教なんだぞ！　なんでこんなところに出家しないといけないんだ！」

と、新聞記事や週刊誌を叩きつけられ、毎日のように責められました。けれども、なんとかして説得しようとしたんです。すると、一カ月後には、出家の意志が固いということを理解してもらえて、

「そこまで言うんだったら、出家してもいい。」

ということになりました。

最後は両親が親戚を全部集めて、お披露目会の席を設けてくれて、オウム真理教の本を親戚みんなに何冊ずつか渡しました。そこで、

「じゃあ頑張ってこい！」

と激励までされて、めでたく出家することができたんです。

◉極限のワーク、そして修行

出家修行者は、日々「すべての魂の救済」という尊師の意思を具現化するための奉仕活動を行なう。そして、一定の時期に集中的に修行をし、解脱・悟りを目指すのである。

正師は、出家後しばらくして外回りの運転手をするようになった。睡眠時間を極限まで削って、全力で奉仕活動にあたった。ところが、思わぬことがきっかけとなり、修行の日は意外に早く訪れることになる。

ある日、事故を起こしてしまったんです。相手方の非が八割で、こちらは一応正当でしたが。ところが、事故を起こしてしまったということで、自分の心の内側が爆発してしまったんですね。ものすごいプライドと嫌悪が出てしまって。自分は「名ドライバー」でいたかったというようなプライド、「無事故無違反、しかも目的地にだれよりも早く着く」というようなプライドの修習がいっぺんに壊れてしまって。事故自体は大したことはなかったんですが、それで急にワークが全くできなくなってしまったんです。

それで、サクラー正悟師に修行の許可を得ようと思ってお伺いしました。

「ワークが全くできないので、一日だけ修行させてください。……今のままではワークができないんです。だから、富士山の道場で二十四時間だけ修行をさせてください。翌日からまたワークをやりますので。」

「そうですか。じゃあ、尊師にお伺いしてみます。」

すると、尊師から修行の許可が出ました。

それでさっそく道場に行き、修行を始めて一時間したころ、今度は尊師から直接お電話がありました。「今までどのような修行をやっていたのか」とか「修行課題をどのくらい達成しているのか」とか、いろいろとお尋ねになってから、こう言ってくださったんです。

「じゃあ、修行に入れてあげようか。……成就するまで修行から出さない。それでもいいか。」

と。それで、心がすっかり変わってしまったんですね。

「ヤッタ！　これでわたしにもやっと成就が巡ってくるんじゃないか。」

すっかり落ち込んでいた気持ちが一八〇度変わって、修行に入っていきました。

◉敵は貪り

修行の第一歩は「証智」といわれる。自己の内側にどのような煩悩があるのかを正確に理解することである。心を散乱にし、自己をごまかす材料に満ちた現世

では、なかなか本当の自分を知ることはできない。しかし、二十四時間の厳しい修行の中では、それまで見過ごしていた自己のけがれが如実に浮き彫りとなる。

経典の記憶修習の修行に入った正師も間もなく、乗り越えなければならない壁が何であるか、いやというほど認識することになる。それは、クンダリニー・ヨーガの成就に至るまでの長い闘いの始まりであった。

この修行では食の制限がありました。食を貪ると意識が外に向かいますし、眠気も増大して集中できなくなるからです。もっとも、修行が進んできますと内的なエネルギーが満ちてきますので、食が少ない方がかえって調子がいいくらいになるのです。ですから、食の制限は極限の修行をする修行者には欠かせないものなのです。

最初は自分でも食を制限しようとしていたので、全く苦ではありませんでした。ところが、二カ月を過ぎたころ、その食事量でどうしても足りない人は食事回数

や量を増やすこともできるという情報を耳にしたんです。すると、そこから貪りの解放がされてしまって、ずるずると二食食べたり、量を増やしたりするようになってしまいました。ちょうど、心が潜在意識に入ってきて、貪りのカルマが現われ出したんですね。

現世で飲食商売を九年ほどもやっていましたから、わたしは食のデータのけがれが非常に多く、貪りが強かったんです。当然、貪りを捨断しなければ成就できません。このときは成就できなくて当然だったと思います。

四カ月間の経典の記憶修習、その後三カ月の経行と教学の修行を終え、正師はいったん支部での奉仕活動に戻った。捲土重来の思いを胸に秘めながら……。

◉「死ぬ気で頑張ります」

九一年十二月、尊師から全サマナ（出家修行者）に向けての通達が出された。

それは、

「クンダリニー・ヨーガを成就させるために、修行者を選抜して極厳修行に入れる。この修行に入りたい者は決意文を提出するように。」

というものであった。何が何でも成就したい——「死ぬ気で頑張りますから、この修行に入れてください」——正師も迷わず決意文を出した。そして、再び極厳修行が始まった。

このときは、この修行さえやれば絶対成就できるんだという確信がありましたね。なにしろ、尊師が成就させようと意思してくださっているわけですから。

自分の最大の煩悩はやはり貪りだと思っていました。だから、貪りに対しての捨断を「死ぬ気で頑張ります」と言ったつもりだったんです。それで、十八日くらいの断食をやったんです。そのときは貪りはそんなに出ず、なんとかやれました。

けれども、修行が進んで潜在意識に入ってくると、そこで貪りが出てきたんです。そのときには特に規定はなかったんですが、やはり量を少なくしないと成就できないだろう、ということで、食の量を減らしてみんな頑張っていたんですね。ところが、だんだん量が増えてしまいました。それどころか、ヴィジョンにもそういった食の煩悩がひたすら出てくるんです。わたしの場合、現世での貪りの修習がそれほど多かった、ということですね。結局、食の量がどんどん増えて、修行が思うように進まなくなったんです。

その後、修行班は一時的な解散があり、支部活動のワークを二十日間ほどして、修行再開となりました。最初は淡々と修行できていたんですが、しばらくして潜在意識に入ると、またもや食との闘いに入っていったんです。

◉断水断食に挑む

クンダリニー・ヨーガの成就とは、空中浮揚（瞑想中に体が持ち上がるダルド

リー・シッディ)、高次元の光への没入、変化身の体験、意識の連続という四つの体験をすることが第一条件となる。そこへ至るための心得として「現世捨断」というものがある。ここでいう現世とは、「食べること、寝ること」などの現世的な煩悩を指している。それらに対する執着を断つということ、それらが必要なのだという観念を捨てるということである。

食の煩悩に悩まされていた正師は、その打開策として、以前尊師が説法でお話しになった断食を実行しようと決めた。貪りを乗り越え、早く成就したい——そんな思いが強くなっていたころだ。

しかし、尊師はそんな正師の決意を表面上認めながらも、暗にその落とし穴について警告を発されていた。そのころ行なわれた、尊師と正師の質疑応答、尊師説法にそれがうかがわれる。

ヴァジラ・アナーサカ正師「以前、修行班に向けて尊師がアドバイスされたこと

の中の一つなんですけれども。七日間断水断食、そして寝なければ、変化身の体験はだれでもできるということをおっしゃったと思うんですが、四つの体験はこのとき四つともすんでいると解釈してもよろしいんでしょうか。」

尊師「結局六カ月間、意識の連続がなければ供養値魂とは断定されないから、四番目は、一週間は意識の連続が続いたと。だから、それによって、四つとも一応経験はしたと。だから、今までいわれている『正師』の状態にはなっていると。しかし、その後の阿羅漢の状態にはまだないというふうに考えたらいいんじゃないか。」

正師「はい。そうしますと、逆を考えますと、今修行してまして、七日間の断水断食、そして、寝ないということがもしできたとしたら、このプロセスはおのずと踏んでいるというふうに考えてよろしいんでしょうか。」

尊師「それはいいと思うね。」

…中略…

尊師「たとえば、『成就の達成だ、一週間の断水断食やればOKである、寝なきゃOKである。頑張るぞ！うん！』、ま、確かにこれは、思念の連続、意志の強さ、抜群だし、それからそのときの状態というのは、マハー・ムドラーの入り口と見て間違いないと思う。そこまではOKだ。しかしそれが、成就した後のプライドを満足させるだとか云々という意識状態がもしバックにあるとしたら、それは成就した後のけがれが大きくて、四つの体験はあっという間に消えてしまうだろうという、わたしのアドバイスを聞いてくれ。」

正師「はい。ありがとうございます。」

（九二年四月三日　直弟子用説法後の質疑応答より）

——例えばO君（正師のこと）やU君が、七日間の断水断食に挑戦していると。これは素晴らしい決意であると。そしてそれに対して、一生懸命奮闘していると。これも素晴らしいと。そしてその思念が、「水を飲みたい」という渇愛の思念で

はなく、「よし、わたしはこの一週間の断水断食によって、必ず解脱の印を得るんだ！」という、強い思念が、内側に内在し固定されるならば、それは必ず円滑な、そして、円満なクンダリニーのヨーガの成就、あるいは、悟りの確定へとつながることだろう。

（九二年四月十一日　直弟子用説法より）

七日間の断水断食・不眠で四つの体験ができるということで、

「やるしかない！」

と決意しました。修行もだんだん長くなってきましたので、早く成就して結果を出したいという思いもありました。それでまあ、一週間の断水断食をやるわけなんです。

正師はこの断水断食を見事に成し遂げた。しかし、期待していた四つの体験は

得られなかった。それはまさに、尊師の示唆された落とし穴にはまってしまったからである。

断食をやっていると、他の修行者からも「すごいね」「すごいね」と称賛されるわけですね。それで、いい気になって、

「七日間の断食をやっている。わたしは他の人と違うんだ。」

というプライドを持ってしまい、しっかりと修行をやっているような気持ちになったわけですね。ただ、不眠、意識の連続ですね、寝ないという条件が五十数時間しか達成できていませんでしたから、神秘体験がなかったのはこれが原因じゃないかと思ったんです。

しかし、今にして思えば、その断水断食の目的が単に神秘体験を求めるだけのもので、グルに対して意識が向いていなかったんですね。自分ではグルに向けているようなつもりではいたんですけれども、潜在的にはやはり自分に帰依をして

いたんですね。しかし、そのときはそれに気づかず、しばらくしてから再度断水断食に挑戦することにしました。

「七日じゃダメだ。今度は十日を目標にして、十日間のうち七日間の連続した意識状態を保とう。」

と決意して。しかし、結果的には逆に精神的に落ち込む原因を作ってしまいました。

最初は非常に軽快に瞑想修行もできていたため、正師は断水断食に手応えと期待を深めていた。しかし、わずかに紫の光をちらっと見る程度で、九日目には瞑想修行が全くできなくなってしまった。断水断食自体はやれる状態だったが、瞑想ができなくなったことに断食の意義を見いだせなくなり、尊師のご示唆を仰いだ。尊師からの回答は「食事を取りなさい」ということだった。

それがきっかけとなり、一気に貪りの心が解放されてしまった。一日にご飯を

十杯もかき込んだのはこのときである。

もともとの食の煩悩、そして現世での飲食業の経験がもたらしたデータのけがれ、それらは正師に重くのしかかった。

さらに、正師の心を暗くした原因があった。それは、修行中出てくるヴィジョンが尊師ではなく、かつて帰依していた外道時代の師匠だったことだ。

「成就とはグルから与えられるもの」「帰依なくして成就はない」——頭ではわかっているそんな言葉も、自己の帰依のなさを思い知らされた今となっては自分とは遠い世界の言葉のように思われた。

「自分には素質がないんだ。いくらやってもダメだ。」

卑屈に陥った正師は、修行意欲を失い、寝てばかりいるような状態が数日続いた。

◉一日のうちに四つの体験

ところが、そんな状態にあった正師がほどなくして四つの神秘体験を一気に終

わらせてしまうことになる。それは、弟子の引っかかりを正確に見抜かれる尊師のご示唆がきっかけとなった。

「立位礼拝を一日四時間から五時間入れなさい。」

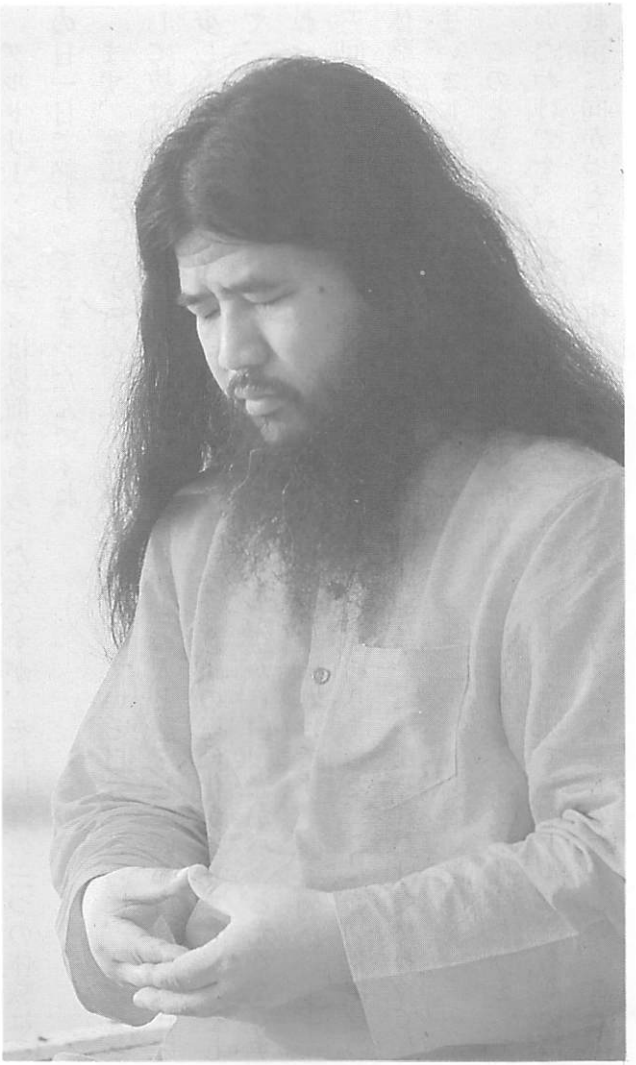
それが尊師の指示であった。サマナ向けに五大エレメントのイニシエーションがあった五月のある日のことである。

帰依の心を培う土台ともいえる立位礼拝の修行、まさにそれこそがそのときの正師に必要な修行だったのである。

（何をやっても経験できないし、ましてやる気はないし、せめてグルのおっしゃったことだけはきちんとやろう。他の修行はできなくても。その四時間はひたすら集中して、できるだけ早く立位礼拝するぞ。尊師、わたしはまだ帰依ができていないから、帰依させてください！）

正師にしてみれば、すがるような思いであった。

四つの体験は一週間もしないうちに起こった。



ダルドリー・シッディは以前からあったんですが、それ以降の三つの体験はその日一日で終わってしまったんですね。

まず、意識が三つあるんです。究竟の瞑想をしている自分。さらに、変化身として抜け出して、修行場の建物の台所で見知らぬ人と話をしている自分、それを少し上空の方から見ている自分というような、意識の三分化がありました。そして、その台所にいる自分がハッと気づくと、上空から白銀光がパッと光るんですね。ものすごくまぶしいんで、うわっと目をつぶるわけです。断続的に、十二、三回、その白銀光に照らされているという経験がありました。これで、変化身の体験と、光の経験、そしてそのときの意識の連続。たったそれだけで終わってしまいました。

このとき、瞑想修行はあまり手が付かず、帰依しか考えず立位礼拝だけをしていたわけです。やはり帰依が培われてきて、本当の意味で心がグルに、あるいは救済に向かったとき、体験というのはおのずと与えられるものだ、ということを

身をもって知りました。グルの偉大さを実感しました。

体験はそろった。しかし、まだ根深い貪りが捨断されたわけではなかった。四つの体験をクリアしたということで行なわれた一回目のアンダーグラウンド・エアータイト・サマディもクンダリニー・ヨーガの成就と認められるものではなかった。尊師からも、信徒時代の活動の短さから来る布施の実践、戒律の遵守、法則に従って生き、カルマ落としに耐えるといった土台の欠如を指摘された。

それでも、霊的なステージは確実に向上していった。その後行なわれた教学の修行では、瞑想はせず、一日中教学に集中することで、いろいろな体験を重ねることができた。

究竟の瞑想では必ず尊師が現われ、示唆を与えられたり、法則を説き明かされたりした。また、アストラルでのシャクティーパットも教学中に二回ぐらいあり、尊師の両手が置かれた頭頂から全身に電気ショックのような、ものごい衝撃が走っ

た。頭の上に尊師が乗られ、エンパワーメントされることもあった。

集中してなされる教学というのは、グルのデータの中に没入することで、瞑想と同じものである。コーザルのデータがどんどんと入れ替わっていき、その途中の段階では、いろいろなかたちでグルが導いてくださる――これらの体験は、正師に改めて帰依の大切さを感じさせた。

あとは貪りの克服。修行はさらに続く。

◉貪りとのあくなき闘い

その間に、あるところのドライバー兼警備というワークが入りました。そのときに尊師は、わたしの貪りの煩悩を捨断させようということで、コメントをくださったんです。それは、みんながいる前で、非常に恥ずかしいコメントでした。

「せいぜいうまいものでも食って、外食でもして、次に修行に入るときは捨断できるように。」

と。もう、愕然として、赤面してしまいました。これには参りましたね。結局、外食はしませんでしたけれども、やはりカルマなんでしょうか。毎日の食事が大量に必要になってしまったんですが、現世での商売がら、その食事の用意の監督をする羽目になってしまいました。データのけがれがある上に、何を食べてもいい場所だったので、結構料理に凝ったりしました。自分のけがれが出てしまったんですね。しかも、自分も食べてよいという許可がありますから、一緒に食べてしまい、貪りがまた出てしまったんです。

◉早く成就するぞ！

その一方で、このワークの間に、成就に対しての意欲を起こす出来事がありました。グルの意思を実践できず、自分勝手な行動をしてしまったがために、マンジュシュリー・ミトラ正悟師の車を事故で大破させてしまったんです。しかも人身事故でした。

ただ、車が手のひら一枚くらいのすき間を残して壁に激突する寸前で止まったために、相手の方も軽傷ですんだんです。奇跡的でした。現場をご覧になったマハー・ケイマ正大師は一言、

「これはシヴァ大神の祝福ですねえ。」

と、おっしゃいました。事故自体はザンゲに値する出来事ですが、奇跡的に大惨事にならずにすんでいるところは、修行者に示唆を与えるための祝福だということです。わたしは、ただしかられると思って、そのような目で見る心の余裕はありませんでした。

次に、マンジュシュリー・ミトラ正悟師のところに謝りに行ったんですね。そうすると正悟師は、

「いや、これはすべてわたしの心のけがれである。だから、このことを生かして、あなたが修行を進めてくれればいいですよ。」

とおっしゃるんですね。正悟師に何も非はないはずなんですが、現象を絶えず自

己の心の現われと見ようとなさっているんですね。しかも、わたしの修行のことまで考えてくださっている。もう、何も言えなくなってしまいました。心にグッと、込み上げてくるものがありました。

もちろん、尊師に関してもそうです。人身事故を起こした相手が入院していたので、見舞いに行く許可をもらうために、尊師にご連絡したんですね。そうしたら、尊師も、事故のことは何もおっしゃらずに、逆に、「見舞いに持っていく菓子折や果物を買うお金はあるのか。」

というような心配をしてくださって、それだけで終わってしまったんです。心から慚愧の念がわきました。

この出来事を通して、自分も早くこのようなステージに到達したい、マハー・ムドラーを成就したい、そのためにクンダリニー・ヨーガを早く成就しなければならない、と決意を新たにしました。

そのワークが一カ月ほど続いた後、正師は再び教学の修行に入り、教学システムの上級まで終了した。そして、再度ワーク。新しい配属は建築班であった。成就に対する意欲の高まりとは裏腹に、やはり切れていない貪りのカルマに流される日が続いた。

建築というのは、力仕事で体力を使いますから、おなかがすくんですね。結局、食事の量を貪ってしまう状態が続きました。ここまできてもまだ、貪りが落ちていなくて。何度試されてもワナにひっかかってしまうわけなんです。「早くても亀戸の道場が建つ予定の二月くらいまではワークだろう。だからワークに集中しよう」ということも言い訳になりました。ずいぶん貪ってしまいました。

◉激苦の蓮華座修行

ところが、予想は外れ、正師は一カ月後再び修行に入ることになった。九三年

一月のことである。今回の修行は、一週間単位で、内容も極限まで蓮華座を組み、気を上げ、正しい体験をもたらすことを狙いとするものだった。下位のカルマの強い者にとっては、足に激痛が走るほどの厳しさである。

この激苦地獄をいかに超えるかという激しい修行で、正師は最初五分と蓮華座が組めなかった。苦痛にひたすら耐えた。そして、組み替えをせずに三時間は組めるようになってきたころ、痛みがだんだん抜けてくるようになった。また、最大の課題である貪りのカルマを落とすためには、ただ組むだけではなく、その姿勢も大切だった。

貪りが多いと背中が丸まってしまうんです。これは尊師からお聞きしたんですけれども。わたしの場合、背中が湾曲してしまって、曲がったまま筋肉が形を作ってしまっていて、真っすぐにしようとしても背筋が入らないんです。その上、妥協の修習があったので、腰も入らないんですね。蓮華座を組んでも腰が抜けた状

態。そうすると、エネルギーがそこで詰まってしまいます。ですから、自分でもなんとか姿勢を直すようにして矯正し、あるいは教官の方に押してもらって、そこでカルマを受けていただいたりしました。

この一週間の修行は計四回くらいやりました。そのうちに、組み替えしながら二十四時間ずっと、組み替えなくても四、五時間は楽に蓮華座が組めるようになってきたんですね。

◉ツァンダリー、そしてイニシエーション…

そして、四回目の一週間の修行に入ってからは、食に対する欲求がほとんど出ないという、非常に良い状態でした。ただ、修行が非常に厳しいものですから、修行ができなくなってきたんですね。ちょうど浄化も激しくなってきました。鼻が詰まって、緑や黄色の粘り気の強い鼻水が出るようになったんです。そのため、呼吸法もできない状態になってしまいました。それで「一時的にワークに出たい

な」という意識が出てきたんですね。

すると、尊師からちょうどワークを与えていただいたんです。極厳修行場から富士道場までの尊師の送迎ということで、非常に功徳を積ませていただきました。これは五、六回あったかもしれません。最初の何回か運転させていただいている間に自動的にポアが起こり、修行が壁にブチ当たっていたのに、

「もう限界までやるぞ。絶対成就するんだ！」

という意識がどんどんわいてきました。運転しながら、この決意を心の中でつぶやいていたんですね。なんとかこの心の中のつぶやきが尊師に聞こえるように、と念じながら必死で。すると、どんどん心が浄化されていきました。

今にして思うと、尊師が意図してわたしに功徳を積む機会を与えてくださったのだと思います。一回目のチェンバーの後、指摘された修行の土台を固める意味で何度となく修行からワークに出していただいたのも、そういう尊師のご配慮だったのですね。尊師のご慈愛に感謝するとともに、基本的な布施・持戒といった修

行の大切さを感じました。

この運転のワーク中に、尊師に尋ねられました。

「今回の修行は貪りが出ないんじゃないか?」

「そうなんです。すごく心が楽な状態です。……自分ではなぜなのかよくわからないんですけれども、どうしてでしょうか。」

「それはツァンダリーが成功しているからだよ。」

やはりツァンダリーの効果というものは絶大なものがあるんだな、過去の成就者の成就の決め手はやはりツァンダリーじゃないのかな、と思いましたね。

それに加えて、この修行での、尊師のイニシエーションの効果は絶大でした。尊師が自らお作りになったお食事、ウマー・パールヴァティー・アーチャリー正大師が作られた食事を、尊師がまた特別に修法してくださったんです。非常に高い世界のデータが入ってきて、貪りが自然に消えてしまっていたんですね。

こうして、貪りとの長い闘いに、わたしはようやく勝利することができたのです。

◉あとはクンバカ……

限界まで息を止める。二分、三分……。正師に残された最後の課題、それはクンバカ（保息）の長さであった。このクンバカの長さは、修行者の煩悩を測る目安となる。嫌悪、性欲、食欲といった下位の煩悩、あるいは生命に対する執着、この肉体がすべてであるといった誤った観念、それらにとらわれているとクンバカの時間は決して長くならない。これは仏典にもヨーガの経典にもうたわれていることである。

道場ではひたすら極限のクンバカに挑む正師の姿が見られた。

この修行での光の体験は、光に包まれるというかたちではなく、ちょっと屈折した感じでした。ちょうどステンレスに当たって反射するような光の体験を何度かしていたんです。それを尊師にお聞きしたら、

「それはもうコーザルに突っ込んでいるかもしれないなあ。あとはクンバカさえ

延びればチェンバー入りだ。」
ということでした。
実は、そのときのクンバカの状態というのが本当に情けないくらい短くて、ヴァヤヴィヤ・クンバカのレーチャカとプーラカ合わせて二分四十秒くらいだったんです。ところが、尊師がおっしゃるには「最低五分以上、六分行けばまあ大丈夫だろう」ということだったのです。
わたしは頭を抱えてしまいました。しかし、限界でやっていくうちに、次の日には三分十二秒くらい、次の日には四分ちょっと、と延びていったんです。そのときにはレーチャカ二分、プーラカ二分、合計四分、という感じでした。
それで四日目には、
「これを逃したらもう成就はない！　チェンバー入りまでもう少しだ！」
と、限界まで、本当に死ぬ思いで息を止めました。
すると、レーチャカのときに急に心がピタッと止まってしまいました。グルか

らエネルギーが入ってきたのを感じたんです。気がついたら、レーチャカがすでに三分。

「よし、これであと二分だ！」

と思って我慢しました。すると、ついに合計五分四秒を達成できたんです。

それからだんだん調子に乗ってきまして、五分七秒、五分十数秒と延びていったんですね。最終的には、両方合わせて五分二十二秒くらいまで延びました。

これは余談なんですけれども、クンバカが五分以上できるようになると、ものすごく頭がすっきりするんです。今までも修行してきましたから、ある程度はクリアになっているんですが。五分過ぎてクンバカを解きますと、頭がすっきりと、スカーッとして、ほんとにクリアで聡明という状態になりました。心に雑念のわかない状態、ピタッと止まっているという感じなんですね。

◉「ああ、尊師だ」——グルに見守られて

こうして正師は、最後の修行アンダーグラウンド・エアータイト・サマディへと入っていった。地中に埋められた一辺三メートル、二七立方メートルの完全密閉された瞑想室での正師の驚異の記録は、この体験記の冒頭に紹介したとおりである。現世における貪りの修習に何度も挫折を味わった男が、自己を超え、人間を超えたのである。

しかし、その人間を超えた奇跡も、絶えず広大無辺の愛をもって弟子を見守り続けるグルの存在を抜きにして語ることはできない。いや、実際にはそれがすべてともいえるのだ。正師のチェンバーでの体験もまさにそれを裏づけている。

尊師が絶えず、弟子を見守っていてくださるということも、今回のチェンバー修行でまざまざと体験しました。あの危険な環境の中で、修行意欲を弱めることなく五日間の修行ができたのは、グルに守られているという実感なしには考えられません。

今回は絶対に座法を崩さないで姿勢を保とうと思っていましたので、チェンバーの背もたれのようなものに、体をひもでずっとくくっていました。だから、少しヴィジョンに没入したとしても体が倒れないようになっていたんです。でも、何日目かにそれを解いて、少し妥協したくなったんですね。「座法を組みながら体をうつ伏せにして休んでしまおう。少しならいいんじゃないか」という意識が出てきて、少しうつ伏せになったんです。

うつ伏せになった、まさにその瞬間、チェンバーと測定室を結ぶインターホンが鳴ったんです。

「ただ今尊師からお電話があったんですけれど。『酸素消費量のことは気にするな。ひたすら集中しろ』とのことです。」

というインターホンのコメントでした。

「なんてぴったりのタイミングなんだろう。……これは、尊師に見られてる。絶対、やるしかない！」

それからしばらくして、二回目の妥協があったんですね。このときには、同じようにちょっとうつ伏せになろうとしたんです。その途端に、左耳のちょっと上から、少し厚めの窓ガラスを叩くような音が「ゴンゴンゴン」と三発鳴るんですね。それで、またビクッとしました。

「ああ、尊師だ。」

と。それで、修行を続けることができたんです。

妥協はもう一回ありました。そのときは、ちょっとうつ伏せになりかけたその瞬間に、自分が別のものに変わったような感覚がありました。実は、それは猫だったんです。非常に形状・容姿のいい猫なんですが、自分の体がみるみる茶色の猫に変わっていくように感じ、非常に恐怖しました。死生智、つまり死後どの世界に転生するかを知る神通力が、このようなかたちで発現してしまったのです。

「妥協の修習をしているから、今の意識で死んだら、来世は動物なんだ……。これは、修行しなくちゃ……」と思い直して、なんとか修行を続けることができた

わけです。

◉幻身のヨーガ——アフリカ、そしてハルマゲドン

また、瞑想状態、集中力ともに一回目のチェンバーよりもずっと良かった正師は、幻身のヨーガの体験もしている。

まず、チェンバーがなぜか急にアフリカになってしまったんです。そこでわたしはアフリカの救済をしていまして、難民らしい子供たちが寄って集まってくるんですね。それで、お湯で溶いた粉ミルクを配っていくんですが、なくなってしまうんです。かわいそうだと思って、イニシエーションだから本当はいけないんですが、自分の持っているミラクル・ポンドを一杯、二杯とあげていったんですね。けれども、まだ後にたくさんの子供が続いていますし、「かわいそう」という情で救済してはいけない、と思ってやめたんです。

そこで場面が変わりまして、同じアフリカなんですけれども、どういうわけか動物を飼わなければならないことになりまして、キリンと象が出てくるんですよ。それで、どうやって飼おうかと思案するんですね。すると「左の膝の上が空いているから、その上で飼おう」とひらめいたんです。普通に考えたらおかしい話ですが、そのときは非常にまともでしたね。瞑想しながら、そのヴィジョンを見て、しかも動物を飼うというような体験をしました。

ほかに、これはハルマゲドンの最中のヴィジョンに近いんじゃないかと思うんですけれども、敗戦した外国の人たちが、ぼろぼろの服を着て、悲惨な顔をして、うつむき加減で、暗い表情で、ボーッとしたまま、ぞろぞろ歩いている世界に飛び込んでいってしまうというようなこともありましたね。

◉もたらされた心の安定

最終的な酸素濃度九・七七パーセント、二酸化炭素濃度八パーセント。このデー

タが、現代医学の見地から見たらどうなのか、改めて医師のヴァジラティッサ師に聞いてみた。

「酸素欠乏というと、よく高山病を思い出しますが、一般に高山病が起こる酸素濃度は一五パーセントぐらいからといわれています。また、二酸化炭素濃度については、次のようなデータがあります。

一％＝呼吸の回数が増える

四％＝頭痛・めまい・顔面紅潮・耳なり・血圧上昇

六％＝呼吸が激しくなる、全身の血管の拡張（表面から見ても赤くなる）、嘔吐

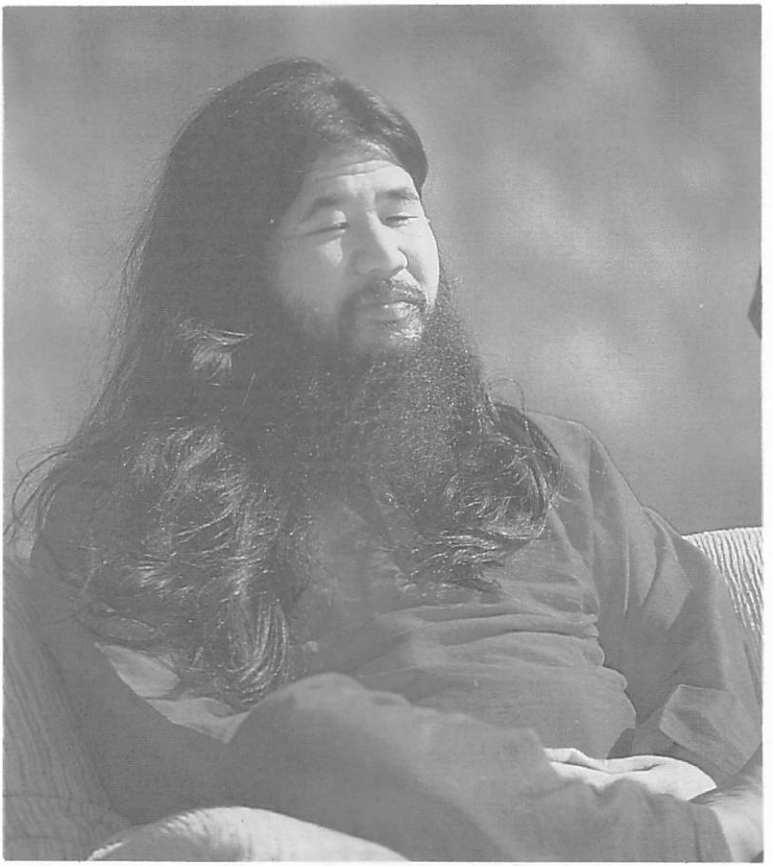
七～八％＝精神活動の乱れ

ここで、注意しておきたいのは、酸素濃度のデータは二酸化炭素濃度が考えられていません。同じように、二酸化炭素のデータは酸素が十分にある状態でのものです。したがって、チェンバーのように密閉された空間で、酸素が減り、二酸

化炭素が増えるという条件では、肉体への影響はもっと厳しいものとなります。この正師のデータを見たら、どんな医者も首をかしげるに違いありません。普通の人間なら、死亡してもおかしくないといえます。」

チェンバーから出てすぐ成就となったわけではなく、それ以前と同じように修行を続けました。

しかし、チェンバーを出てからは、心が止まった状態というか、非常に落ち着いて、雑念がわかないような状態でしたね。四日目くらいに、「成就してるんだろうか」とちょっと思った程度です。それも、五日目に入って、「確信を持ってやるしかない。これが成就じゃなかったとしても、確定させるためにまた修行に入れてもらえるんだから。成就してもしなくても、今回はやるだけやった。座法もビシっと組んで、背筋を伸ばしてやったんだから、言うことはない。……これでダメならまた固めてやっていくしかないな。」



という心の状態になったんですね。尊師に対しては、強い感謝の気持ち。さらに、「頑張ります！　支部に行ったとしても、あるいは違うワークについたとしても、修行を怠らず頑張ります！」という決意も固まってきていました。

やはり尊師はそれを待っておられたのだと思います。マハー・ケイマ正大師が呼びにきてくださいました。

一九九三年三月十日午前三時――わたしはついに成就と認定されたのです。

◉成就は素晴らしい

成就後、正師は横浜支部に配属された。以前とは全く違う自己のエネルギー状態、信徒さんに対する影響力、一言二言が力強く相手の心に入っていくことなど、そのどれもが成就を実感させるものとなっている。

長く厳しい修行の末に得た神通力も、随所に現われるようになった。

ある信徒さんの座法を直してあげたときに、ちょっと触れたんです。すると、触れたとたんに、今まで詰まっていたその信徒さんの鼻が急に全部スーっと通ってしまった、ということがありました。

他心通もあります。ある信徒さんが、シークレット・ヨーガでいくつも相談したい内容があるというので、

「それは一つに絞った方がいいですよ。」

とアドバイスして、変えてもらったんですね。でも、

「一つ引っかかっていることがあって、これだけはだれにも言えないんです。」

と言うんです。すると急にヴィジョンが出てきましたので、それを話したんです。すると、

「何でわかるんですか。」

と非常に驚かれました。ズバリ当たっていたわけです。

そのほかにも、近くにいるとその人の引っかかっているチャクラが振動してヴィ

ジョンが見えることもあります。また、蓮華座を組んでいて痛みがある人がいると、どの部分がどのように痛いか、というのが全部伝わってくるんです。

ときには、相手が思ったこと、言おうと思ったことが文字として出てくることもあるんですよ。

これはやはり成就したな、という実感がありますね。確かに、成就前にもエネルギーロスとか、カルマを受けるとか、若干は感じました。ところが成就すると、自分の感じ方もはるかに鋭くなりましたし、相手に対する影響力も以前と全く違うんです。

◉グルに帰依するしか方法はない

「わたしたちの経験の構成は無常である。経験の構成が無常ということは一般的に悪い意味で使われるが、これは決していい意味でも悪い意味でもない。その法則をもし理解することができるなら、わたしたちは、より素晴らしい魂の進化と

いうものを経験することができる。」

（九三年一月三十一日・大説法祭における尊師説法より）

無智なるがゆえに、過去世から、そして過去において、人は多くのけがれた修習を繰り返している。しかし、人がその経験の構成を乗り越え、心の絶対的な解放を得る術が、オウム真理教には存在している。今回ご紹介したヴァジラ・アナーサカ正師の体験談も、まさにそれを証明している。

法則の正しい理解、ひたむきに修行に打ち込む姿勢、そしてそれらすべてを含めた意味で、正師はそれを「帰依」と言い切る。最後に、堅固な意志によって自己の貪りとの闘いに勝利を収めた正師から、アドバイスをしてもらおう。

絶対的な帰依。もう、何を捨ててでも帰依。これさえ培えば自動的にグルからエネルギーが流れてきますし、的確な修行方法も伝授されますので、修行は飛躍

的に進みます。尊師に与えられた修行を徹底的にこなしていけば絶対に自己の限界を超えて、成就できます。

「限界前で楽な状態でやるのは本当の修行ではない。限界まで来たときに、自分の壁に来たときにやる修行、そこからが本当の修行だ。」

と、尊師はおっしゃっています。だから、自己の限界を超えるように努力していけば必ず成就できるはずだし、間違いなくステージは上がっていくと思いますね。

わたしのように現世での職業がら、煩悩的なデータの多い者でも、あきらめずにひたすら修行を続けていくことによって、貪りを落とすことができました。わたしたちは、オウム真理教の修行によって、確実に進化することができるのです。

わたしたちにはもう時がありません。尊師の予言では、一九九七年にはハルマゲドンです。ですから一人でも多くの人が、いつ死んでも後悔せずにすむよう全力で修行に励み、自己の限界を超えていただきたい、と心から願っています。

わたし自身の決意は、もっともっと教学をし、法を根づかせ、エネルギーを高

め、自己の身・口・意のけがれを浄化し、修行に専念して、エネルギーを高い状態に保ち、グルの意思を実践し、一つでも多くの魂を救済していけるよう、全力で頑張っていきます。

最後に、けがれ多き不肖の弟子にもかかわらず、素晴らしいステージに導いてくださいました麻原彰晃尊師に、心から深く感謝いたします。

COLUMN—1

◎最終解脱に至るまでの六つのヨーガ

一、ラージャ・ヨーガ

強靭な意志力を背景としたヨーガ。現在のインド・ヨーガでは、このラージャ・ヨーガが主流である。ただし、インドでは十年に一人、二人しか成就しないといわれている。

二、クンダリニー・ヨーガ

生命エネルギーのヨーガ。尾てい骨に眠るクンダリニー・エネルギーの覚醒、上昇によって煩悩を昇華する。

三、ジュニアーナ・ヨーガあるいはマハー・ムドラー

分析智のヨーガ。自らの煩悩を思索によって分解する。このヨーガの成就をもって小乗の完成とされる。仏典でいう〝阿羅漢〟の境地。

四、大乗のヨーガ

三つのヨーガの成就をベースに、四無量心（聖慈愛・聖哀れみ・聖称賛・聖無頓着）の実践をなすヨーガ。

五、アストラル・ヨーガ

報身のヨーガともいう。この段階まで

来ると、「魂の救済」以外には全く頓着がなくなる。

六、コーザル・ヨーガ

コーザルでデータの入れ替えを行なうヨーガ。このヨーガを完成して最終解脱をすると、すべてが自由になる。

現在オウム真理教ではラージャ・ヨーガの成就者が約百五十名、クンダリニー・ヨーガの成就者が約百名、マハー・ムドラーの成就者が八名、大乗のヨーガの成就者が三名存在する。

マハー・ムドラー、大乗のヨーガの成就者の体験は、『ザ・サマディ』『原爆覚醒』『マハー・ムドラー』（いずれもオウム出版）などを参照していただきたい。

グルいればこそ

聖者ウッティヤ到遵光正師

八八年十二月の出家以来、ほぼ半分もの月日を集中的な修行に費やしてきた聖者ウッティヤ到達光正師。遠い札幌の地に暮らしながら尊師から十回に及ぶシャクティーパットを受けるなど、在家時代からこだわり続けたイニシエーションによって培われたグルとの太いパイプは、クンダリニー・ヨーガの成就に向けた今回の極厳修行でも挫折を経験する度にそれを乗り越える大きな原動力となったことはいうまでもない。出家後もひたすら極限的な修行に集中し、紆余曲折を経ながらも尊師に意識を集中することに心がけた末に、九三年三月十三日、念願のクンダリニー・ヨーガの成就を与えられた正師。その成就までの軌跡をたどってみよう。

「成就までの修行を振り返って思ったのは、やはりわたしたちは自分一人では何一つできない無力な存在ということです。そして、尊師という、すべてを理解され、すべてをわかってくださる偉大なグルが指導してくださるからこそ、わたし

たちは修行によって神秘体験や心身の変化といった〝結果〟も得られるし、〝進化〟させていただけるということでした。」

七年に及ぶこれまでの修行生活を振り返りながらこう語る正師。在家時代に受けた尊師からのシャクティーパットは十回に及び、さらに、出家後も数々のイニシエーションを受け、確実に霊性を向上させてクンダリニー・ヨーガの成就に到達した者の言葉だけにやはり説得力がある。

正師が真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師、そしてオウム真理教に巡り合ったのは、八六年六月にまでさかのぼる。超常現象をテーマにしたある雑誌で尊師の記事を見つけ、興味を持ったという。

「そのころわたしは高校を卒業して、人材派遣会社を通じて札幌の一流ホテルでアルバイトしていました。それこそ毎日、結婚式やパーティーなど人生の華やかな部分を見せつけられていたわけですが、初めこそ毎日がお祭りのような生活も楽しかったんですが、次第にそういう現世的な幸福に対してどこか覚めた目で見

るようになっていたんです。それで、自分なりに納得できる〝刺激〟〝新しい喜び〟を求めて、音楽や神秘的なものに熱中するようになっていきました。そのころ雑誌でもよく尊師は取り上げられていましたが、もう夢中になって読んでましたね。」

特に彼をひきつけたのは、「シャクティーパット」の記事だった。グルからのエンパワーメントという修行を飛躍的に進める究極のイニシエーションは、自分には全く考えられない世界であり、瞑想修行を志していた正師に衝撃を与えた。

「絶対に一度受けてみたい……。雑誌の記事でシャクティーパットを知ってから、この思いは一度として揺らぐことはありませんでした。」

当時はまだオウム真理教の草創期で、札幌には支部もなかった。そこで東京の本部に連絡を取り、入会を果たすと、通信講座で修行を始めることになったのである。そして、それからわずか二カ月後にはセミナーに参加し、念願の、初めてのシャクティーパットを受けることになる。

「初めてのシャクティーパットですか？　やっぱりすごかったですね。尊師が指

を当てられた額は熱くなってやけどのような状態になりますし、あまりのエネルギーに最後は腰が抜けてしまって立てないほどでした。途中で、白銀の光に溶け込むような感覚もあって、初めて神秘体験らしい神秘体験を経験させていただきました。まあ、このときのセミナーではそんなに集中して修行したわけではなく、ムドラーや調気法をやってはフラフラと散歩したりということを繰り返していましたから、まさにあの体験はシャクティーパットによる尊師のエネルギーなしには語れませんね。」

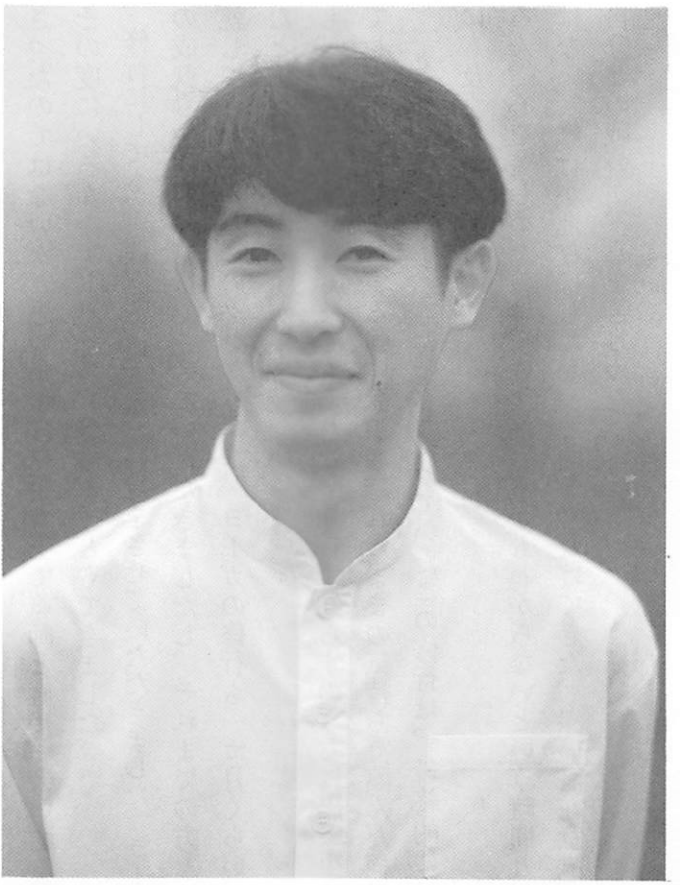
この一回のシャクティーパットによって人生観が変わってしまった——このときの体験は、正師にとってそれほどまでに強烈だった。「言葉は悪いかもしれませんが、あれで病みつきになった」と述懐するように、その後、八六年九月、同十二月、八七年一月、同三月、同五月、同六月というように、遠く北海道から立て続けにセミナーに参加しては、尊師のシャクティーパットを受けることになる。このころは、まさにシャクティーパットだけが生きがいだったといっても過言で

はない。

そんな正師が出家を果たされたのは、尊師のシャクティーパットが終了した八八年十二月のことである。「特別に、出家してどうしたいというのはありませんでしたが、尊師のシャクティーパットが終了してしまったので在家で修行している理由がなくなりました……」と出家の理由を語るように、正師には尊師のイニシエーションに対するこだわりがあった。いわばそのこだわりによって築き上げられたグルとの太いパイプが、後にクンダリニー・ヨーガを成就させていただく上で大きな原動力となるのだが……。

出家後は、修行とワークとを繰り返しながら徐々に霊性を高められ、八九年十一月にラージャ・ヨーガを成就。そして、その後、九〇年九月からいよいよクンダリニー・ヨーガの成就に向けた極厳修行に入ることになる。

「わたしの場合は四カ月と同じワークを続けたことがありませんでした。現世的なものへの執着が強い方でしたから、おそらく飽きさせないように尊師が配慮し



てくださったのではないかと思います。ワーク上で尊師と直接お会いする機会も多く、その度にいろんなアドバイスも受けることもできました。

また、修行にしても、短期的にいろんな修行をさせていただきました。ラージャ・ヨーガの成就も短期間の修行でさせていただきましたし、それまでの方々も短期間で成就していたので、このクンダリニー・ヨーガの修行も一カ月くらいで終わるものだと思っていたんですが……。」

しかし、そんな目論見はもろくも崩れた。知らず知らずのうちに出家生活に慣らされてしまい、成就に対する強い欲求も忘れたままの気持ちで臨んだ極厳修行。「どうせ一カ月もすれば……」と高をくくっていたこの修行は、最終的には一年二カ月にも及んだのである。

もちろん、心を苦しめたのは、いつ終わるかもわからないという時間との闘いだけではない。修行が進むにしたがって頭をもたげてきた、深い潜在意識に潜んでいる自分との戦いが、心を苦しめた。

「最初は阿蘇で修行していたんですが、本当につらかったんですよ。昼間は暑くて夜は寒いという環境ですし……。それでも頑張って修行を続けていたんですが、蓮華座の苦しみを乗り越えたころから貪りが出てきたんですよ。そのときは食事の量の制限があったんですが、それに耐えられなくて……。すさまじいぐらい餓鬼のカルマが出てきて、そのヴィジョンに没入して、行動にまで影響するようになって……。結局、阿蘇では四カ月くらい修行していましたけど、最後はもうギブアップ寸前でした。」

自分から放棄するのは残念だけど、もう修行から出していただこう——初めて経験する挫折の前に自信を喪失させられたそんなころ、まさに心を見透かしたように尊師からタイミングよく修行班を富士に移動するという指示が下りた。「あのころは阿蘇の空間そのものが貪りの空間になっていて、『これはだめだ……』とちょうどギブアップを決意したころでしたから、本当にあれで救われました」と述懐するように、まさに絶妙のタイミングだったわけである。

「それまでがあまりにひどかったので、富士に移ってからは本当に心が楽になりました。もちろん、心の葛藤は続きましたが、『修行はポテンシャルになるから成就しようがしまいが、いつかそれが現象化するときは来るだろう。その日を信じて、今は目の前の修行に全力で取り組もう』という気持ちでとにかく自分からギブアップしないことだけを考えて努力したんですが……。」

そんな気持ちで修行に集中しようと努力したせいか、この間、成就の認定の一つの目安となる神秘体験も次々と経験できた。在家時代、尊師からシャクティーパットを受ける度に様々な神秘体験を経験したこともあって、ダルドリー・シッディ、光の没入などを体験する度に「尊師が成就を意思されて、エンパワーメントをなさってくださっているんだな」と実感できたという。

ただ、それでも成就にまで至らなかったのは、やはりこのときの帰依が「完璧ではなかった」からだろう。尊師から与えられた修行を順調にこなし、体験をそろえていったものの、何かが違うのは自分でも薄々気づいていた。それは最終的

に、「修行とワーク、半分ずつにしたい」という自分の意志を修行班の指導をしている師にアピールするかたちで表われるが、そのときはこのアピールがグルへの疑念ゆえの行動であることには気づかなかった。

「昔から修行はそれなりにこなしてきましたが、振り返ってみると、尊師の指示を自分なりに納得できるように解釈してからやってるんですよ。逆にいえば、納得できなければできないというか、そういう意味でこのころは表面上は帰依ができていたかもしれませんが、本当の意味での帰依ができていなかったと思います。このときも、シビアな見方をすれば、もし尊師を百パーセント信じていたなら、ただ与えられた修行を淡々とこなしていたでしょうからね。自分勝手にこれは効果があるないと判断して、ああやりたいこうやりたいと言ってるうちは、やっぱりだめなんですね。」

その後、修行形態が変わって、九一年十一月、比丘(びく)説法士として名古屋支部に配属。「成就まで頑張ろう」と決心した長い修行を出ることは寂しかったが、「こ

こで積んだ功徳をエネルギーに今度こそ成就しよう」と気持ちの切り替えも早く、三カ月間、ひたすらワークに励んだ。当時は気づかなかったそうだが、このあたりの気持ちの切り替えの早さに心の成長をうかがうことができる。

クンダリニー・ヨーガの成就に向けた本格的な修行はそれからだった。九二年二月、再び極厳修行に入った正師は、順調に修行を進められた。成就に必要な四つの体験も程なくして起こった。さらに、一番心配された貪りも、通常の四分の一の食で平然と過ごせる状態が続き、自分でも「成就は近いな」と実感できたという。

ただ、このときの修行は、ロシア救済ツアーなどもあり一カ月も経たないうちに中断。その後、同年三月から修行は再開されたが、結果的には、この中断が正師の心の奥底に潜んでいた成就への焦りという悪魔を引き出すことになったのかもしれない。

「説法のとき尊師が『一週間断水断食をやって不眠なら成就だ』とおっしゃった

んです。それで、それ以後は断水断食に意識が向かうようになって、三日間とか五日間とか断水断食に挑戦していました。ちょうどそのころは、聖者アティッカンタペッティヴィサヤーナンダ化身成就正師とか聖者ヴァジラ・アナーサカ化身成就正師などが一週間を達成したころだったんですね。それで争うように挑戦していたんですが、自分の場合、体験が止まってしまっていて、尊師から『そんなのやめなさい。食に引っかかって修行ができないようなら、ちゃんと食を受けて修行をした方がいい』と怒られてしまったんです。結局、それでもやめられずにその十三日後に八日間の断水断食を達成するわけですが……。」

「一週間の断水断食と不眠」という具体的な目標を提示されたとき、その目標に向かって脇目も振らずに突っ走っていったのはやはり成就への焦りからだろう。その集中力はさすがだが、その末に、尊師からのアドバイスまで耳に入らなくなってしまうのだからやはり尋常ではない。こんな状態で成就など与えていただけるわけもなく再び挫折。断水断食の反動で恐れていた貪りが生起し、この間安定し

て食を厭逆できていたのが嘘のように、身体は暴飲暴食でむくんでいったのである。

「このときは、正直いって、食そのものに苦しみを感じていたわけではなかったんです。ストレスというか、尊師への当てつけというか、そういう自分の姿を見せることで救っていただきたい、早く成就させていただきたいと思ったんでしょうね。それからは『修行ができない』『修行から出してください』と尊師に対して頻繁にお伺いを上げるようになって……。そんなことをしなくても尊師はすべてわかっていらっしゃるのに、これもやはり帰依ができていないがゆえの疑念だと思いました。」

そんな心の状態を尊師がご存じないわけがない。「修行から出たい」との申し出の真の意味を理解され、その弱音を黙殺するか、あるいは「立位礼拝を一日二時間やりなさい」「他の修行をやらずに決意だけをやりなさい」とさらに厳しい修行プログラムを指示されてきたのである。

「やはり帰依ができてなかったということなんでしょうね。それと修行の意味を取り違えていたということでしょう。出家してから修行ばかりさせていただきましたが、よくよく考えたら納得できる修行、つまり、自分で修行を選んでしまって、好きなことしかやってこなかったんですよ。結局、このとき三カ月間、ひたすら決意だけをやらせていただいたんですが、深い潜在意識に修行の機根を根づかせることができて、あれでだいぶ変わったと思います。」

その後、いったんは支部活動に戻るが、成就のチャンスはすぐに巡ってきた。九三年一月二十八日から再び極厳修行に入ることになったのである。

「尊師のイニシエーションのとき、ホテルに呼ばれて尊師からいろんな具体的なアドバイスをいただきました。そのとき『今年は成就させるための時間をあげるから』とも言われていたんです。それで、今度こそという気持ちは強く、満を持してこの修行に臨みました。」

しかし、「修行は慣れているから」と自信を持って臨んだその修行は、今まで

経験してきたどの修行よりも激しく厳しいものだった。厳しい指導のもとに極限の蓮華座を組まされての修行で、どんな状況だろうと常にマイペースで修行をしてきた正師にはとても耐えられるものではなかった。やがて、指導の師への反抗が目立つようになり、修行もできずに爆発寸前の状態が訪れることに……。

「今まで好きにやらせていただいたツケが返ってきたんでしょうね。エゴが満たされないことに腹が立って、もう飛び出す寸前でした。」

そんなピンチを救ってくださったのは、やはり尊師だった。やがて激しい蓮華座を組むことを拒み指導の師との間で口論が目立つようになると、尊師自らが乗り出して厳しく叱責。さらに、身体に触れながらの座法の伝授をしてくださったのである。そして、「この座法を二十四時間組みなさい」と課題を与えてくださった。

「このイニシエーションでポアされました。このとき自分を追い込むということがどういうことかわかったんです。それまでにも断水断食などかなり激しい修行

はやってはいましたが、それはすべて自分の好きな修行だったんですよ。ところが、今回の蓮華座は、厳しい指導のもとで不平不満がいっさい言えない修行でした。この状況で修行を行なうことこそ、本当の帰依だと思えるようになってきたわけです。」

自分の状態を証智できたこの出来事から、心は一気にチェンジした。蓮華座の激痛は悪業が落ちている証拠と我慢できるようになった。そして、それまで嫌がっていた極限の蓮華座にも自ら挑戦していくようになり、クンダリニー・ヨーガ成就のための課題の一つとされていた厳しい条件での六時間の蓮華座も、一番で達成した。

そこに至るまでの過程での体験も順調だった。ダルドリー・シッディ、強烈な光の没入なども経験し、成就が時間の問題であることを自分でも実感できた。

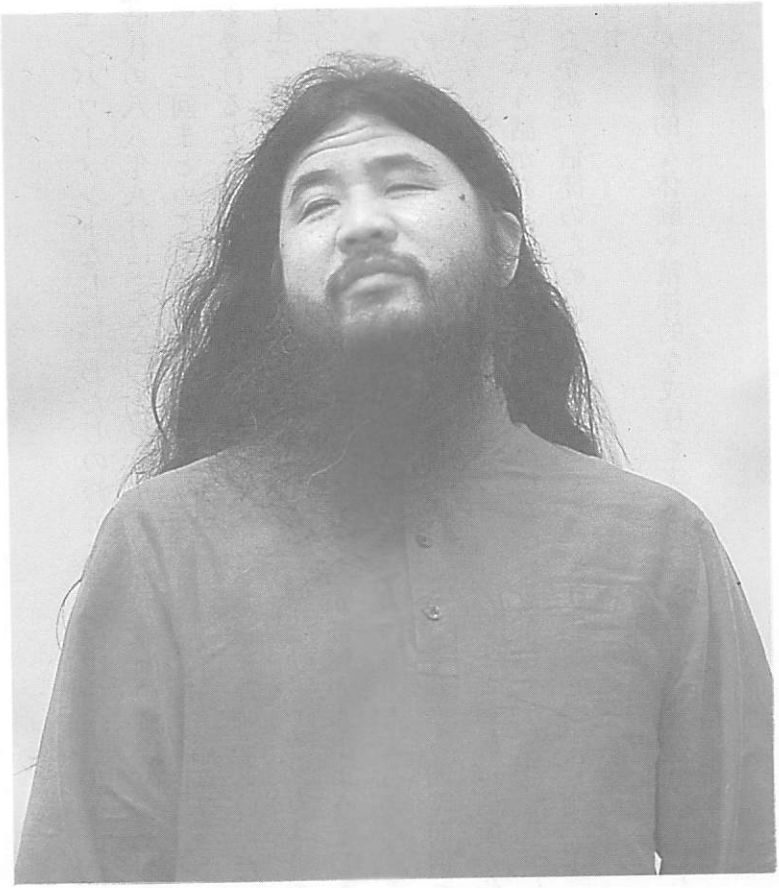
「チェンバーに入ったのはそれからすぐでした。このチェンバーの中でもいろんな神秘体験をさせていただきましたが、なんといってもグルのエネルギーを感じ

ることができたのが一番の喜びですね。昔から神秘体験の度にグルのエネルギーを感じてはいたんですが、あの過酷な条件の中で自分たちが生きているのは、水とか空気とか物理的なものではなく、グルのエネルギーがあるからこそだと思ったとき、尊師の偉大さ、そしてその偉大な尊師に帰依することでどんなに多くの恩恵を得られるのかという帰依の本当の意味がわかったようでうれしかったですね。」

九三年三月十三日、長い長い修行の末にようやく念願のクンダリニー・ヨーガの成就を与えられた正師は、その後、京都支部に配属になり、後進の指導にいそしむ毎日を過ごされている。

出家以来、ワークの功徳は成就のためのエネルギーと考え、ひたすら成就を目標に邁進してきた正師。四年半に及ぶ出家生活を振り返って、こう語った。

「人一倍現世的な執着が強かったわたしが出家できたのも、こうして成就させていただいたのも、すべて尊師のお蔭です。尊師からの貴重なアドバイス、そして



貴重なエンパワーメントなしに、わたしの修行は考えられないと思ってます。

信徒時代の八八年八月にこんなことがありました。尊師の最後のシャクティーパットで、三回まとめて受けることができました。三十分に及ぶ強烈なエンパワーメントを受けることができたわけですが、そのとき最後に尊師からいただいたのが、『今生で解脱しましょう』という言葉でした。そして、包み込むような笑顔でそうおっしゃってくださった後、ちょうどわたしが部屋から出ようとしたとき、尊師はバタンと横になられたんですね。そのときはびっくりしたものの、さほど気にもとめなかったんですが、後で人に聞いたところ、それから四時間倒れられていたということでした。この最後のシャクティーパットで尊師は何度か死にかけられたという話がありましたが、もしかしてこのときもそうだったのかもしれません。たかが一信徒のためにここまでしてくださったのかと思うと、頭が下がる思いです。

わたしが神秘的な体験や精神的な成長を実感できたのは、昔からこうした尊師

からのエンパワーメントの直後でした。今回の修行でクンダリニー・ヨーガの成就を与えていただいたわけですが、この成就は在家時代からイニシエーション等によって培われた尊師との太いパイプ、つまり尊師の神秘力の力にほかなりません。自分のこの体験を多くの人に伝え、そして、この修行で体験的にも理解させていただいた尊師の法の伝導者となり、一人でも多くの方々が上向できるように全力で精進していきたいと思います。」

COLUMN—2

◉六神通

・神足通
空中浮揚やテレポーテーションを行なったり、高い世界へ飛んだりすることのできる能力

・天耳通
神々の声を聞いたり、普通の人間なら聞くことのできないほど遠くの音を聞いたりする能力

・他心通
他人の心を知る能力

・宿命通
前生を知る能力

・天眼通
一般に遠隔透視能力といわれているが、これは北伝系仏教の間違いであって、実際には南伝仏教のいう死生智のこと。
死生智とは転生先を知ったり、生きながらにしていろいろな世界とつながる能力

・漏尽通
完全なる絶対なる神の叡智

仏教では、修行を行なうことによって、これら「六神通」と呼ばれる神秘的な力が身につくとされている。

この「六神通」について詳しく知りたい方は、以下の本を参照していただきたい。

『超越神力ＰＡＲＴ１　天耳通・他心通』
『超越神力ＰＡＲＴ２　前生を知れ！死生智の秘密』『超越神力ＰＡＲＴ３　完全なる絶対なる神の叡智、漏尽通』
（いずれもオウム出版・麻原彰晃著）

ただ一つの道を

理者タントラティンナー到遠光正師

「今回の修行に入るにあたって心がけたことは『わがままを言わない』ということでした。」

半年に及ぶ極厳修行を振り返って、聖者タントラディンナー到達光正師はこう語った。挫折を乗り越えて培った帰依の心を「わがままを言わない」という言葉に込めて臨んだ極厳修行。それは、まさしくグルへの帰依と煩悩との相克そのものだった。そして、すべてをご存じのグルの庇護のもと煩悩との戦いに打ち勝ち、クンダリニー・ヨーガの成就という輝かしい勝利を得たのである。帰依こそがすべて——。正師の成就への歩みは、わたしたちに帰依の尊さを雄弁に語りかけてくれる。

タントラディンナー正師とオウム真理教・麻原彰晃尊師との出会いは、「運命」としか表現できないものだった。

その日、正師はいつものように車を運転して家路を急いでいた。右に曲がると

我が家まで一直線という交差点の信号がそのとき赤でなかったら、正師は修行とは無縁の一生を送っていたかもしれない。しかし、運命は正師を一つの道へといざなった。赤信号で停車していた間に、ふと本屋へ行かなければならないという気になったのである。仕事の帰りに本屋へ寄ることはそれほど珍しいことではなかったが、この日は特別だった。

「よく考えると、何かに呼ばれていたような、そんな気がします。何気なく本屋へ行くのとは違った、〝予感〟めいたものがありましたから。」

と述懐しているが、そこへ行くことが当然であるかのように、信号が緑に変わると同時に左にハンドルを切っていた。

その書店に入ると、足は自然に一冊の本に向かって進んでいた。書名は『生死を超える』。表紙の、白い霧の中で何ものかに真摯な祈りを捧げている白い衣をまとった聖者の姿を見たとき、今日この本屋へ来なければならなかった理由を悟ったような気がした。そしてその直感どおり、正師は、この麻原尊師のご著書をきっ

かけとして、それまで無意味にさまよってきた心の旅から解放されるための道を歩み始めることになったのである。

正師の心の流浪は、はるか昔、記憶のぼんやりしているころからすでに始まっていた。人が生まれた意味。人が生きていかねばならない意味。そして、自分という存在の意味。そんなとてつもなく大きな命題に、常に心を傾け、答えを模索してきた。時には両親に、時には友人に、時には文献にその答えを求め、問いかけてきたのだが、そのどれからも納得のいく答えは得られなかった。

(生存の意味を知らないで、どうして生きていけるのだろう?)

正師は、周りの人たちが何の疑問も抱かずに、満足そうに日々生活していけるのが不思議でならなかった。

そして気がつくと、いつしか思うように心を開くことができなくなってしまった自分がいた。あまりにも大きな命題をかかえてしまった心は、周りの環境にも、世間の常識にも溶け込むことができず、ただ一人「違う! 違う! 生きるという

のはこういうことじゃない！」とつぶやくことしかできなくなっていたのである。

心は「真実」を求めてさまよいながら、それを内側に秘めて毎日を送らねばならなかった正師。しかし、この日を境に、正師の生き方は大きく方向を変えていったのである。

貪るようにして読んだ『生死を超える』には、これまで得ようとしても得られなかった回答があった。人が生まれる意味も、人として生きる意味も、簡潔な言葉で説明されていた。そして、自分自身を今の苦しみから解放するには、「解脱」しかないという示唆も得ることができた。

「解脱」――。これまで曖昧な響きしか持たなかったこの言葉が、急に現実味を持って目前に迫ってきた。麻原尊師が歩んできた解脱への道。そしてそのあとに続いている多くの弟子たちの体験談。そのどれもがまやかしではないことは、飾りのない簡潔な文章から読み取ることができた。そして、自分も修行をすれば、尊師の弟子のように、必ず一歩一歩心を高め、いずれは解脱を得ることができる

という確信を与えてくれもした。

出口もわからない暗闇の中に射し込んだ一条のまばゆい光にいざなわれて、正師は間もなくオウム真理教への入信を果たした。自己の存在意義を探し、あれほど苦しんでいたときには一度たりとも現実味を持って考えたことのない「宗教」、そして「信仰」によって自分を解放しようとしていることに、今では少しの惑いも持ってはいなかった。

何事にも一途に、真正面から取り組むタイプの正師が出家を決意するまでには、それから三カ月も必要としなかった。

昔から、ほのかなあこがれにも似た思いを抱いていた出家。道場で目にする出家修行者たちのすがすがしさ、「解脱」と「救済」という人間として最も崇高な目的を持った者たちの輝きは、正師を圧倒し、いずれ自分もそのような輝きを手にしたいと思わせるに十分だった。

それにも増して、麻原尊師の存在は絶対だった。あらゆる疑問をたちどころに

解決してくださる並びない智慧、そばにいるだけで心を和らげてくださる広大無辺の慈愛、信徒や弟子の状態を一目で見抜き、適切な指導をしてくださる神秘力。それらすべてが正師のあこがれてやまなかった「完璧な魂」のこの世での発現の姿だった。

それだけのものを目の当たりにしてしまった今では、これまで疑問を抱きながら生きてきた世界で暮らすことは無意味に思えた。もちろん、出家をし、解脱を目指すには、想像を絶する困難が待ち受けていることもわかっていた。しかし、解脱への道こそが、今の自分にとって「ただ一つの道」であり、これまで抱えてきた命題の回答でもあったのである。

正師が最初のクンダリニー・ヨーガの成就に向けた極厳修行に入ったのは、出家から二年ほど経った九〇年十一月のことだった。クンダリニー・ヨーガの成就には、通常では認識できない潜在意識を理解し、そのけがれを証智し捨断していくというプロセスが不可欠である。したがって、極厳修行では、いかに深い意識

に到達するかということが鍵となる。正師が自己の内側にひそんでいた「もう一人の自分」と対峙しなければならなくなったのは、地獄のカルマを落とすために蓮華座の激痛に耐え、十二時間ほどは楽に組めるようになったころからだった。

混乱はこのときから始まった。深い潜在意識に入るにしたがって出てきた自分の知らない自分に愕然とさせられたのである。

このとき正師を苦しめたのは、食・味覚に対する貪りだった。そして、そのヴィジョンを厭逆できずに、むしろ楽しむことを許してしまう自分に気づいた。出家以来、徹底的に戒律を守り抜くことに心がけ、強い意志で実践してきた自分とは全く異質の自分。最も嫌っていたはずの要素が自分にあり、その欲望の虜にさえなっていることに気づいたとき、正師の心は大きく揺れた。それは、生真面目な正師には耐え難いことだった。「食欲を厭逆しなければならない」と思う表層の自分と「食を楽しんでしまえ」と心の奥でささやく自分。もちろん後者がより深い意識状態の自分だとはわかる。それゆえに自分を許せない。正師は、追い込ま

れた末に、修行を放棄して道場を飛び出してしまった。

そんな正師を救ってくださったのはもちろん尊師だった。修行を飛び出してから二日後、悩みに悩んだ末になす術もなく実家に戻ったが、最も大切なものを失った虚しさで心は暗く沈むばかりだった。そんな状態を見計らったように、尊師からタイミングよく電話がかかってきた。

「地獄のカルマが切れたら、動物のカルマと餓鬼のカルマが出てくるのは当たり前じゃないか。……とにかくすぐ戻ってきなさい。いいね。」

厳しく、それでいて慈愛に満ちた尊師の声に、心の重荷は一瞬にして溶けてしまった。そのとき悩まされていた、貪り、そしてそのヴィジョンを楽しむことを許す妥協の心は、実は、地獄のカルマを落とした極限の蓮華座修行の上に立脚したものだったのである。修行が進んだからこそ証智できた自己の煩悩、そして、この不安定な状態は通過せねばならないプロセスだと気づかされたとき、肩の荷が下りた思いだった。

「自分が許せなくて、信徒からやり直そうと覚悟を決めて飛び出してきましたから、もう二度と戻れないと思っていたんです。ですから、尊師のあの一言で本当に心が救われました。道場に戻ったとき尊師は、『もう戻ってくる気はなかったんだろう?』とおっしゃったんですが、やはり全部お見通しだったんですね。このとき尊師に二度目の救済をしていただいたんだと思いました。」

この修行でクンダリニー・ヨーガの成就にまでは至らなかったものの、いろんなことを学んだ、と正師は語る。

「蓮華座でカルマが落ちること、そして、自分の知らない自分が深い潜在意識に潜んでいることなどを体験的に理解させていただきました。それと煩悩に翻弄されて一度還俗してしまったわけですが、いろいろ考えているうちに、人の生き方には上向の道と下向の道の二つの選択肢しかないことに気づかされました。そのほかに得たものとしては、この修行でダルドリー・シッディまでは体験させていただいたわけですが、神秘体験は必ず起こるということですね。」

その後、いったん修行を出るが、一度芽を出した煩悩との戦いは続く。持ち前の責任感の強さからワークはこなすものの、精神的には揺れが大きく、戒を守れないことも度々だった。そして、程なくして、経行教学の修行に入ることになったが、やはり心の揺れは大きく、修行に集中できず、教学テストを全く受けない日さえ続いた。

そんな状況を救ってくださったのもやはり尊師だった。ある日、突然尊師が道場へ来られ、全サマナを集めた上で、正師を含む教学テストを受けないサマナたちが壇上に呼び出され、厳しい口調でこうおっしゃったのである。

「一人一人、出家の目的と修行の目的を言いなさい。」この問いかけに、目前の苦しみに没入してしまったがゆえに忘れていた強い思いが呼び起こされた。

(そうだ。わたしが出家したのは一日も早く解脱したかったからだし、そのために修行をしなければならないんだ。)

一瞬にして心が変わり、出家をしたころの気持ちが甦ってきた。そして、その

後に続く「君たちに教学をさせているのは、智慧によって解脱がもたらされるからだ」という尊師のお言葉に、今行なっている教学修行の意義を見いだせ全力で没頭できたのである。

「それからは必死に教学に取り組みました。そのとき気がついたんですが、尊師の説法の中に、自分を縛りつけていたいろんな煩悩との対決の仕方が随所に説かれていたんです。改めて尊師のすごさを確信したと同時に、尊師の指示されたことを全力でやるのが苦しみから解放される、修行を進める一番の早道だと思いました。」

その後は、四カ月ほど『サキャ神賢直説根源仏典』翻訳チームで経典の翻訳のワークに携わった後、その当時教団が行なっていた修行体系変更のための準備という重要なワークを与えられた。

文字どおり寝食を忘れるほど忙しいワークだった。もしワークを滞らせたら支部活動がストップしてしまうほど責任が重く、心の状態が良くても悪くても集中

せざるを得ない状態だった。この極限のワークの中で、正師は尊師が与えてくださったこの環境の意味を悟るようになった。

「極厳修行に一度入れていただいたということは、尊師が自分の成就を意思されている、そう思えるようになったんです。そして、こういう重要なワークにつけてくださるということは、尊師が『成就しなさいよ』と思っていらっしゃるんだということが、次第に身に染みてわかるようになりました。」

このワークは、聖者マハー・ケイマ最上善逝と行動を共にすることも多かったため、先達たちの修行に対する姿勢を目の当たりにすることにもなった。尊師のご意思を正確に、かつスピーディーに具現化することにいつも全力を尽くされる最上善逝の姿に、弟子の帰依の姿勢と、それこそが心を成熟させていくための近道であるということを学ぶことができたのである。それは、「自分も早くステージを上げて、本当の意味で尊師の救済活動のお手伝いができるようにならねば」という強い決意にもつながった。

さらに、集中的な教学修行の成果か、このころになると、なす術もなく煩悩に振り回されていた状態から、心の内側をある程度冷静に観察できるようにもなっていた。クンダリニー・ヨーガの成就への準備は、こうして徐々に整えられていったのである。

そんな正師に再び成就のチャンスが巡ってきたのは、極限のワークを続けて五カ月ほど経った九二年九月のことである。前回の極厳修行では、煩悩に負けて修行を放棄してしまったが、今回はどんなことがあっても修行だけは続けよう。それが、成就を意思してくださっている尊師に対する最低の帰依なのだから——。正師は、その帰依の心を「わがままを言わない」という言葉に込めて極厳修行へと臨んだ。

悪魔との対決の日は、程なくしてやってきた。最初のうちこそ淡々と修行に集中することができたが、心の奥深くに巣食っていた食へのとらわれが次第にその本性を現わし始め、徐々に食事の量が増え、ついには規定の時間以外にも食事を

取ってしまうようになってしまったのである。

貪りが過ぎたためだろうか。ある日、突然胃が痛み出した。修行どころではない痛みを必死にこらえていたそんな状態を見計らったように、尊師からシャクティー・カーリー（尊師二女）の勉強をみてほしいという指示があった。正師は困惑してしまった。尊師のお子様のようにステージの高い方は、エネルギー状態が悪い者が同じ部屋にいるだけで相手とエネルギーの交換が起こってしまう。今のようなひどい状態でお会いしたら、悪い影響を与えてしまうに違いなかったからである。

おずおずと部屋を訪ねると、聖者ウマー・パールヴァティー・アーチャリー最上善逝（尊師三女）が入り口で待っていた。

「わたしは今、本当に具合が悪いんですが、入っていいんですか？」

「尊師が言ったんだからいいよ。」

最上善逝は、うなずきながら部屋に招き入れた。そして、しばらくするとおな

かを押さえるようにして、

「あ、おなかが痛くなってきた。」

そして、次の瞬間、申し訳なさで恐縮している耳に、

「やっぱり、尊師の言ったとおりだ。尊師は、『タントラディンナーが来たら、おなかが痛くなるよ』って言ってたんだよ」という言葉が耳に飛び込んできた。

(やっぱり尊師は、すべてお見通しだったんだ。)

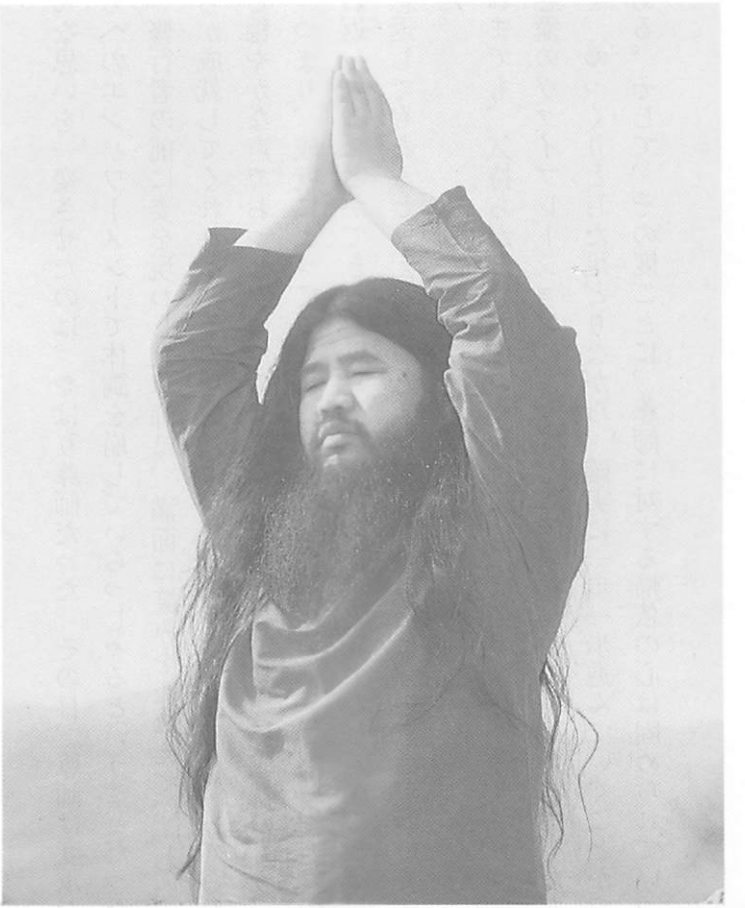
汗が引いていくような思いの中で、実はお子様の勉強をみるというのは、自分の状態を証智させるために尊師が与えてくださった貴重なチャンスであったということを悟ったのはいうまでもない。

この出来事をきっかけに、正師は食の煩悩に対する冷静さを取り戻すことができるようになった。貪りが生起したときには、グルに供養するか、もしくは、その対象を徹底的に分解し捨断するという方法が採れるようになったのである。初めはうまくできなかったが、繰り返し繰り返し修習することで、貪りの生起は次

第に緩やかになっていった。

そして、次第に心が鎮まっていったころ、正師は「わがままを言わない」という自分自身の言葉の意味の深さに気づいた。これまでは、教学で真理のデータを入れた場合、自分の観念や価値観をその真理のデータで修正して、その先に到達すべき何かがあると考えてきた。しかし、結局それは自分のエゴを肯定していることにすぎず、そうではなく、自分の観念も価値観もすべて捨ててしまって空っぽの器になること、それがグルとの合一の条件ではないかと思い至ったのである。これは大きな心の変化だった。そして、気がつくと、それまで〝自分〟というものに縛られていた心が、ふっと解き放たれ、自由になるのを感じていた。

それ以降は、決して修行に否定的な気持ちがわかなくなった。極限の蓮華座にも、ひるむことなく立ち向かえるようになり、クンバカも少しずつ延びていった。ただ、観念が強いせいか、成就というものは、まだ自分にとって遠いものであるという感覚は残っていたのだが……。



そんな思いを一変させたのは、やはり尊師だった。その日、尊師は度重なる弟子たちへのエンパワーメントで体調を崩していらっしゃるということだった。しかし、修行者の前に姿を現わした尊師は、満面に笑みをたたえて、「わたしは、君たちが成就してくれれば、その功徳によって体調が良くなると信じているんだよ」と穏やかな声でおっしゃったのである。そのとき、初めて成就のもう一つの意味、つまり、成就によってこれまで尊師にしていただいたことの何分の一かでもお返しすることができると思い至った。自分が成就するということは、尊師への恩返しでもあると思えたそのとき、成就へのさらに強い意欲がわいてきたのだった。

これまでも、気持ちが変わっていく節目節目には必ず尊師の導きがあった。尊師の慈愛のヴァイブレーションによって、尊師の神秘的な力によって、ただ一つの道を、ゆっくりとした足どりながら、確実に一歩一歩進んでいくことができたのである。そして、その度ごとに、尊師に対する帰依の心は固められていったの

である。

その後の修行は順調だった。光への没入、変化身の体験、意識の連続といったクンダリニー・ヨーガを成就するための条件をゆっくりとクリアしていき、アパンクリヤでのクンバカが二分を過ぎたとき、尊師からチェンバーへ入るようにと指示が下りた。

チェンバーの中では、心は非常に穏やかだった。何か現象が起こったとしても、悩むことなく「これは妥協である」「これは疑念である」と捨断することができた。また浮かんでくる食べ物もすべて尊師に供養することができた。いつしか意識の奥深くから出てくる様々なデータに、全く心を動かすことなく淡々と対応することができるようになっていたのである。

クンダリニー・ヨーガの成就——。それは荒れ狂う煩悩の鎮まりと同時に正師のもとに訪れたのであった。

「成就してからは、顔つきが変わったとか、とげとげしいところがなくなったと

か言われます。それは、本当に巧みな尊師のお導きによって、落とすべき煩悩を落とすことができたからだと思います。成就によって得たものはたくさんありますが、この心の変化は最も貴重なものです。」

かつて自分で自分に強いていた緊張から解放され、晴れやかな笑顔で語る正師。

最後に、苦い昔の体験を振り返りながら、こんな決意を語ってくれた。

「まだオウム真理教を知る前のことですが、昔、家庭教師をしていたころの教え子に自殺されてしまったことがありました。その直前にいろんな神秘的なサインがあってなんとなくわかっていたんですが、観念が強くてそういうものが信じられなかったし、自分に自信がなかったから相談に乗ることもできないと思って連絡できなかったんですね。もし、あのとき連絡していたら……と思うと、やっぱり残念ですね。

もともと直感的なものは鋭い方ですが、この修行で観念を崩していただいてさらに磨きがかかったようです。信徒さんと接していると、相手がどういうことで

悩んでいるかもすぐにわかるようになりました。深い潜在意識にある自分のけがれに打ち勝って自信も持てましたし、これからは同じように苦しんでいた方々を一人でも多く救済したいと思います。そして、自分自身が尊師に救っていただいたように、尊師のように完璧な神通力が身につけられるように精進して、あのときのような後悔は二度とないようにしたいと思います。」

今、正師は新たなスタートラインに立った自分を感じている。目の前には長く険しいただ一つの道が開けている。そして、その道のはるかかなたには、すべての魂の成長を願う、これ以上ない広大な慈愛に満ちた尊師の世界があるのだ。その世界へ向けて、正師は新たな一歩を刻もうとしている。

〝逆境〟に導かれて

聖者ナーギタ到達光正師

◉プロローグ

人はだれもが独自の人生を持っています。このオウム真理教に出家し、ワークや修行に励んでいるサマナたちにも、それぞれ様々な想いがあり、事情があり、シチュエーションがあったに違いありません。

しかし、わたしほど変わった経歴を持ち、特異な経緯を経て出家に至った者は、あまり他にはいないのではないでしょうか。

わたしは、ある時期を境にして、まともな人生を歩いていません。また、かなりの悪業も積んできました。時には、人から後ろ指を指されるようなことを平然とやったこともありますが、わたしは今までの自分の人生を、決して後悔はしていません。もし、必要とあらば、いつでも何度でも同じような人生を歩いてもみせましょう。

――しかし、もし今生で、偉大なるグル麻原彰晃尊師と出会うことができなかったとしたならば、わたしの人生は、全くの徒労と苦渋に満ちた悲惨な終わり方を

していたに違いありません。

わたしはいつも、ある種の〝満足感〟を抱きながら死にたいという欲求を絶えず持ち続けてきました。それは、「死に方はどうでも構わない。とにかく自分が多くの人々の役に立ち、『自分が生まれてきたことは決して無駄ではなかったんだ！』と納得してこの世を去りたい」という願望です。

しかし、もしこの世界に麻原彰晃尊師がいらっしゃらなかったとしたならば、わたしのこの願いは永遠にかなうことはなく、きっと後ろ髪を引かれるような思いで一生を終えなければならなかったに違いありません。

◉マンガ家になるんだ！

わたしは小さなころから、絶えず自分の〝生きがい〟というものを追い求め続けてきたように思います。とにかく、目的も何もなくただボーッと時間を過ごすということがとても苦手でした。そのせいか、わたしが将来の職業を決めたのは

かなり早く、「マンガ家になるんだ！」と決心したのは小学校二年生のときでした。周囲の大人たちは、それをよくある子供の一時的な思い込みだと笑って見ていたようです。

しかし、これはわたしの性格なのですが、一度選んだことや決めたことを途中で変えるということがとても苦手で（というよりも、そういう行為自体が嫌いなのです。自分の基本方針（ポリシー）に反する）、またかけもちや二股というのも、中途半端やいい加減というイメージがして好きになれないという〝癖〟を持っていました。

最初は全く相手にしていなかった両親も、中学、高校と変わらずに言い続けているわたしにあきれてしまったのか、高三の夏休みに上京した際に、勝手に『Dプロダクション』への入社を決めてきてしまったわたしに対して、特に反対はしませんでした。おそらく、反対すれば家出をしてでも上京しようと決心していたわたしの心を見抜いていたのかもしれません。

ところが、ようし、これで求めていた仕事への第一歩を踏み出せるぞ！——と、

そう喜んだときに、わたしはハッと気づいたのです。ところで自分は、いったいどんな作品を描いたらいいのだろうか?——と。

それは、もちろん〝良い作品〟だ。アマチュアのままならば、今までのように好きなものを、自分勝手に自由に描いていても別に構わないだろう。しかし、プロになってしまったら立場が違うのではないだろうか? 自分の描いた作品が印刷物となって、多くの人々(特に子供たち)に読まれ、様々なかたちで感化してしまうはずだ。自分さえよければそれでいいんだ、と言える立場ではなくなるのではないだろうか?

〝良い作品〟とは何か?——この問題にぶつかった途端に、わたしは自分の作品が描けなくなってしまっている自分に気がつき、うろたえ、そして悩みました。

わたしの周りの多くの人たちは、だれにでも共通する〝良い作品〟なんて夢物語であって、個々の価値観が違うのだから、そんなものはあり得ない! と主張しました。しかし、自分と他の人々に共通する〝良きもの〟の存在を信じること

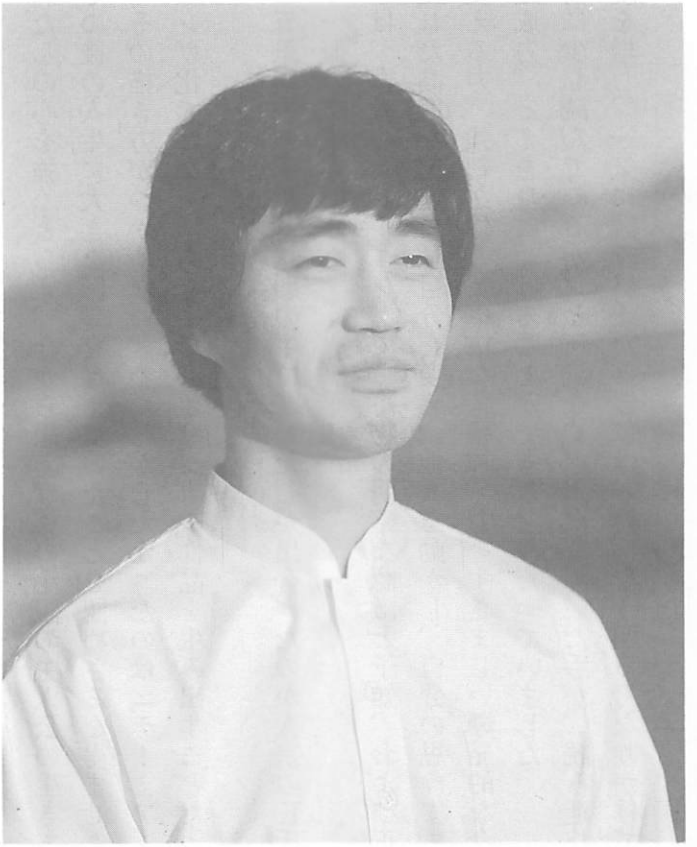
ができなくて、どうして読者に向かって作品を描くことができるのだろうか？という疑問がわたしにはあったのです。

◉宗教との出会い

どうしてもっと早くこの問題に気づかなかったのだろう、と悔やんでみても後の祭りです。結局、Dプロでの二年間のアシスタント生活は、この〝何か〟を求め続けるという暗中模索に終始して過ぎてしまいました。

もっとも、わたしには一つの夢があって、わたしが一番影響を受けた小説に、中一のときに読んだヘルマン・ヘッセの『デーミアン』という作品があるのですが、こんな感じの作品をいつか描けたらいいなあ、という想いをずーっと抱き続けてきました。

――善悪を超越した、あるいは神と悪魔とを統合した神〝アブラクサス〟。そして〝カインの一族〟という今までの聖書の常識をひっくり返すような斬新な解



釈は、わたしの心を強くとらえ、今から思えばこの小説の主人公の生き方は、わたしのその後の人生に大きな影響を与えていたことを認めざるを得ません。――しかし、その描き方がつかめない。わたしがしたかったのは『デーミアン』そのもののマンガ化ではなく、あくまでもオリジナル作品を生み出すことだったのですから。

そんな五里霧中の手探り状態の中で、わたしが出合ったのがA宗のK氏が書いたという一冊の文庫本でした。

その本は、密教のトレーニングで、事物の明確な認識と予知、および正確な選択力。優れた高度な創造力。自分を変え、他人を動かし、自分の思うままに環境を作り変える力。強靭な体力と卓抜な〝精神〟力。すさまじい爆発的な念力による願望達成力。……を身につけることができるとうたっていました。

寝る前に少し読んでみるか、と何気なくページを開いた手が、読み進むにつれて加速度を増し、一気に読み終えたときには、外はもう明るくなりかけていまし

た。

もちろん、今にして思えば、A宗は真理ではなかったわけですが、わたしの人生に多大な影響を与えたことは確かです。なにしろ、宗教なんて大嫌いだったわたしが、半年以上悩んだあげく、ついにその道に入る決心をしてしまったのですから。

◉外道時代

それからの、約十年間に及ぶA宗での経験は、わたしにいろいろなことを教えてくれました。学術的な仏教の基礎知識、運命学、臨床心理学等々をはじめとしたいろいろなことにかなりのめり込んでいったのもA宗の影響だったようです。

中でも、これはわたしの人生の生き方そのものを変えてしまったといっても決して過言ではないのですが、わたしを〝世紀末の救済〟に目覚めさせてくれた、ということでした（もっとも救済とはいっても、それは単に今生における現世的

なものにしかすぎなかったわけですが)。

このころ、わたしは何度か〝魔境〟に陥りました。〝魔境〟とはいっても、わたしの場合はちょっと変わっていて、まず、意識がチェンジしてストレスが全くなくなります。そして心が非常に安定して明るくなり、睡眠時間も極端に短くなります。一種の〝覚醒状態〟が続くのです。そして、何事に対しても非常に積極的になり、いろいろなインスピレーションがわいてくるようになりました。また、性欲が極端に低下し、その種の外的刺激に対して反応しなくなるというか、異常に抵抗力が強くなってしまうのです。そして、他人の心の動きが手に取るようにわかってしまうという経験も時々ありました。

いったいこれの、どこが〝魔境〟なんだ? と言われそうですが、要するに、帰依をしていた対象が〝真理〟ではなかったわけですから、最初は調子が良くてもだんだんピントがずれてくるというか、狂ってきて、だいたい三、四カ月でこの〝高揚感〟は消え去り、元に戻ってしまうというパターンを繰り返していたの

でした。

そして、この〝魔境〟に入る時期というのが、わたしの場合、運命学でいうところの〝天中殺〟と呼ばれる時期と連動していて、ある友人からも「冬になると元気が良くなるね」と言われたことがあるくらいです。

このころのわたしの生活はといえば、二十歳の終わりに結婚し、二十四歳のときに長男が生まれ、さらにその一年半後に長女が生まれています。

仕事の方は、子供ができたのを機に、それまでのフリー・アシスタント生活から足を洗い、伯父の経営する会社に入社。ちょうど新会社を設立したてのときで、また、会社自体もそれほど大きくなかったこともあって、事務、経理、営業、倉庫管理、ルートサービス等々何でもやらされました。簿記を独学で勉強したのもこのころです。お蔭で、それまで会社の〝か〟の字もわからなかったわたしが、どういう仕組みで会社というものが成り立っているのか理解できるようになりました。

しかしその会社も、三年後におよそ八億の負債（昭和五十七年当時）を抱えて倒産し、結局わたしは一つの会社の誕生（登記手続きの書類作り）から倒産（社名変更、残務整理）までの全過程を、いろいろな人間関係をも含めて経験することができたのでした。

その後は、顔見知りの印刷関係（版下制作）の会社で働くようになったのですが、この版下という仕事は、マンガ家アシスタントとしての経験をかなり応用できる非常にやりやすい仕事でした。加えて、十年以上続いていた仲間との同人誌活動を通じて、編集やレイアウトの技術を学び、また印刷に関しても、一応原価計算（見積り）ができるまでの勉強はしていましたので、かなりの仕事量を臨機応変にこなすこともできました。

そして、まあ、ここまでは、わりとまともな人生（？）を歩いてきたといえるのではないでしょうか。ところが、わたしは今まで数え切れないほどたくさんの失敗をしてきましたが、その中でも特に際立った二重の失敗を、この後で経験す

ることになりました。

◉実現しなかった〝夢〟

それは、独立して始めた仕事の失敗と、同時進行で決まった離婚の成立でした。正直言って、当時は自殺を考える一歩手前まで落ち込みました。ところが、ある意味ではそうなることは前もってわかっていたのです。天中殺と天命殺（艮宮の年）が重なり合って始まる年でしたから、これから先三年間は絶対におとなしくしていようと、固く心に決めていました。

しかし、まさに〝神がかり〟ともいうべき異常さで立て続けに発生した周囲のトラブルが、わたしを独立して仕事を始めざるを得ないような状況に追い込んでゆき、そして、独立した途端に、こちらに仕事を回してくれるはずの会社自体に仕事がピタリと入らなくなってしまったのです。その会社にとって、創立十何年以来全く初めての異常事態なのだという話でした。

――結局、わずか半年足らずでわたしの開いた事務所は閉鎖に追い込まれてしまいました。実はわたしにとって、この〝独立〟は特別の意味を持っていました。心の中に「自分は、何か大きな力によって動かされたんだ！」という実感があり、それを感じたからこそ長年温めてきた〝夢〟を実現させるべく、あえて渋谷駅から歩いて五分というマンションの一室を、その拠点として選んだのでした。ただ単に生活のためだけの仕事だったら、もっとずっと安い場所を選んでいたことでしょう。

わたしはいつからか〝救済〟に結びつくような仕事（会社）の形態を探し続けていました。

日々の生活に追われているような状態では、満足できる〝救済活動〟などとうていできるものではない。したがって、ただ単に日銭を稼ぐといった方法には限界がある。それとは違った、一回一回の仕事がそのまま財産になっていくような方法を考えなければならない。――ということは、その会社の形態は〝特許〟と

〝著作権〟、そして〝版権〟をフルに活用したものになるのではないだろうか。と、漠然と考えてはいたのです。

そして、当時A宗にどっぷりとつかっていたわたしは、K氏の説く〝求聞持聡明法〟に多大の期待と希望を見いだしていました。〝求聞持法〟さえ成就することができれば、わたしの夢は実現する！　そう固く信じ込んでいたのです。そしてそのころ、いよいよその〝法〟の伝授が始まるらしいという、まことしやかなうわさが信徒の間でささやかれ始めていました。

そのような状況の中で、天中殺の真っ最中にあえて〝動いた〟のは、わたしを独立へと追い込んだ一連の諸現象が、この〝会社〟づくりに今から着手せよ！という一種の〝啓示〟なのではないだろうか、と考えたからでした。

ところが、そんな未来への期待も、あっという間に大きな空振りに終わってしまったわけです。その上、というかそれと並行して、もともとそれほどうまくいっていなかった結婚相手との関係も著しく悪化し、離婚へと突き進んでいきました。

わたしの人生の中で、このときほど苦しんだことはほかにありませんでした。

◉子供が生まれて……

愛別離苦――わたしは仏教でいうところのこの苦を、このとき、いやというほど思い知らされることになりました。もちろん、結婚相手に対してではありません。当時五歳になっていた長男に、わたしは大変な執着をしていたのです。

「あなたはね、子供が生まれてからガラッと変わってしまったのよ！」

別れる間際に、結婚相手が言いました。

最初はこの言葉があまりピンと来なかったのですが、後でいろいろと考えていくうちに、なるほどと思うようになりました。

もともとわたしは子供というものが嫌いでした。身勝手で、わがままで、気にいらないことがあるとすぐに激しく泣きわめく〝エゴ〟の固まり。それが子供だと思っていたのです。子供が天使だなんて言う奴は、きっとどこかが狂っている

に違いないと本気で考えていました。

ところが、いざ自分に子供が生まれてみると、それまでの観念があっさりと崩れてしまったのです。——子供って、こんなにかわいいものだったのか！　そう感じ始めたのは、長男が生まれて半年近く経ってからでした。

わたしの結婚相手はアニメーターとして働いていました。腕はかなり良かったのではないでしょうか。離婚後、宮崎駿氏の某映画作品のスタッフの中に、動画の筆頭として彼女の名前を本で見つけたとき、改めてそのことを認識させられました。

彼女が子供ができたとわたしに打ち明けたとき、続いて口から出てきたのは、

「ああ、これでわたしは一生動画止まりやわ。」

というういらだちの言葉でした。アニメーターの場合、普通は動画をマスターした後で原画へと進み、それから作画監督やキャラクター・デザインといったようないろいろな仕事の可能性が開けてくるのですが、〝今〟子持ちというハンディキャッ

プを背負ってしまっては、その道をあきらめなくてはならない、ということなのです。

「この責任は取ってくれるんやろうね！」

という言葉は、この後も一種の脅し文句として幾度か聞かされることとなりました。

長男を生んで少しの休養を取った後、彼女は外注のフリー動画家として再び仕事を始めました。このアニメの仕事は締め切りとの闘いです。特に、最後の追い込みともなれば徹夜になることも珍しくありません。わたし自身も、マンガ家アシスタントとして同じような生活を経験してきていますから、そのあたりの事情は十分理解しているつもりでした。

しかし、彼女は性格的にかなり短気でヒステリックな一面を持っており、イライラしてくると、コップや茶碗を床に投げつけて割ったり、時には食事中のテーブルをひっくり返すということもありました。そして、仕事の締め切りに追われ

てストレスがたまっているときに、子供の世話などで手を煩わされたりすると、よくその怒りが爆発したのです。

聞くに耐えないような罵声が、ようやく這い這いのできるようになった幼児に向かって浴びせられました。大阪育ちの彼女は、わたしとはかなり言語感覚が違っていたらしく、時々こちらがギョッとするような言葉を平気で使ったりするところがありました。わたしだったらよほどのことがない限り絶対に使わないような言葉を、結構簡単に使ったりするのです。

昔から〝判官びいき〟の傾向の強かったわたしにとって、彼女の性格や仕事の事情を考慮に入れたとしても、この光景は〝弱い者いじめ〟としか映りませんでした。今までにもいろいろな問題はあったわけですが、それらはあくまでも彼女とわたしとの問題でしたから、こちらの意識（価値観）をチェンジさせたり、やり方を工夫することによって、なんとか解消することができました。しかし、今回は自分の問題ではありません。

「子供が生まれてから変わってしまった」と、彼女に指摘されたとおり、わたしの彼女に対する〝嫌悪〟の修習は、このころから始まっていたのでした。

◉輝きに満ちた関係

このままでは、子供があまりにもかわいそうだと感じたわたしは、会社から戻ると育児に多くの時間を使うようになっていきました。何冊かの幼児教育の本によって、小さいころのスキンシップが子供の心の安定にとても大きな影響を与えることを知り、毎日欠かさずに添い寝を始めたのもこのころからです。

長男が二歳のとき、夏休みで故郷へ帰る伯母たちと一緒に、一人で新潟へ一カ月近く遊びに行っていたことがあるのですが、帰ってきて伯母がわたしに、

「この子はちょっとおかしいよ。田舎でただの一回も、親を求めて泣いたりしなかったんだから。あんたたち、いったいどういう育て方をしているんだい？」

と、半ばあきれたように言いました。

しかしわたしに言わせれば、それは逆にそれだけ子供の心が安定している証拠なのです。親をいつも追い求めて泣くというのは、親にとってはうれしいことかもしれませんが、逆に心が不安定だからこそ起きる現象なのだとわたしは思っていました。

わたしと長男とのこのころの関係は、普通の父子の域を超えていたのではないでしょうか。わたしは彼によって、生まれて初めて〝本当に人を愛する（決して溺愛ではありません）〟ということがどういうものなのかを教えられました。もちろん、生まれてから五歳くらいまでの、子供としては最も可愛い時期を一緒に過ごしたのだ、ということはあるでしょう。ですが、これがわたしの人生における〝最も輝きに満ちた関係〟であったことに、変わりはないのです。

◉子供たちへの誓い

別居生活が始まり、借金を抱えていたわたしはタクシーの運転手として仕事を

始めました。このころのわたしの状態は、全くひどいものでした。ですが、生活がかかっていますから、とにかく仕事を休むわけにはいきません。タクシーの仕事は一回の勤務時間がかなり長く、一日おきの週三回、月にして十三回のノルマをこなせばよかったのですが、仕事以外のほとんどの時間を、わたしは布団の中で眠り続けていました。起きていて意識があると、苦しくて仕方がなかったからです。とにかくじっとうずくまり、長い冬が通り過ぎるのを待つ動物たちのように、ただひたすら眠り続け、時が過ぎていくのを待ったのです。

結局、わたしがこの状態から抜け出すのに、半年以上、一年近くの時間が必要でした。とはいえ、わたしの場合は全くの自業自得なわけで、本当にかわいそうなのは親の離婚の巻き添えをくってしまった子供たちの方でした。

わたしは子供たちに、とても大きな負債を作ってしまったことになります。これからどういう生き方をすれば、彼等にこの〝借り〟を返すことができるのだろうか。と、そこまで考えたとき、わたしの頭の中に、しばらくぶりに〝世紀末の

救済活動〟という命題が浮かんできたのでした。

このとき、わたしは誓いを立てました。

『子供たちよ。

わたしは君たちに、とても大きな負債を作ってしまった。

この償いは、わたしのこれからの生き方によって、返していかなければならないと思う。

わたしにできること、それは、

君たちに明るい未来が訪れるように全力を尽くすことだと思う。

これから二〇〇〇年にかけて、

世界に未曾有の大破局が訪れることが予言されている。

しかしわたしは、君たちに〝素晴らしい未来〟を約束しよう。

そして、そのためになら、わたしはどんなことでもしてみせよう。

必要とあらば——わたしは、たとえ地獄に落ちても構わない！

だから、これから先何が起ころうとも、
決して、未来への希望だけは捨てないでほしい。』

◉運命の分岐点・1985,10, 4, PM9:26

ようやく、死んだような生活から抜け出したわたしは、積極性を取り戻し、再びA宗での活動に力を入れようと考えました。このころ、ちょうど機関誌の編集部で手伝いを募集しており、何度か顔を出すようになりました。

手伝う仕事はなかったものの、当時編集長であったMさんの講演しているビデオを見て、その感想文を提出するということをやらされました。今にして思えば、MさんはA宗の中で新しい一つの運動を展開しようとしていて、そのための仲間を募っていたようなのですが、このとき、わたしは原稿用紙にして八十二枚にも及ぶ、わたしの十年間のA宗生活の総決算ともいうべき〝論文〟を書いてしまいました。

そして、書きながらなんと、久しぶりに例の〝魔境的覚醒状態〟に入ってしまったのです。

そして、この特殊状態に入ってから二週間近くが経ったある夜、わたしはちょっとしたきっかけから、ある実験を自分のアパートで試みようとしていました。ひょっとしたら、チァクラの開発ができるかもしれない、という期待があったのです。ただ、ちょっと危険な方法（けがれたイメージを使う）なので慎重に試してみようと、まずは密教の護身法を切り、心の準備を整えてゆきました。

ところが、いざ始めようとすると妨害が入るのです。間違い電話がかかってきたり、物が倒れたり、目覚まし時計が突然鳴り出したりと、一つ一つの現象そのものは大したことはないのですが、それが立て続けに何回も起きるのです。

変だなあ。——どうも周囲の気配がざわついている感じがします。やはり、これはやめろということなのだろうか？　しばらく考えた後で、わたしは強く思念しました。

（もし、本当にわたしが今やろうとしていることが間違っていて、やめようとされているのでしたら、どうか、はっきりとそれがわかるような〝験（しるし）〟をわたしに示してください！）

まさに、その途端でした。ドーンと体が大きく縦に揺れたかと思うと、部屋全体が振り回されるように激しい勢いできしみ始めたのです。それが、かなり大きな地震であるとわかったとき、わたしは大きな声で笑っている自分に気がつきました。

わたしがこのとき心の中で思念したのは、『観音経』の偈の中にある「悲体戒雷震（大いなる哀れみを伴った、雷や地震のごとき激しい戒め）」という文句でした。ですから、地震というのは、わたしにとって、まさに望みどおりの〝験〟だったのです。

わたしはある時期、聖書を集中的に勉強していたことがあるのですが、そのとき、「神の力を二度試してはならない」という言葉を知りました。その意味は、

神の力を信じるには、たった一度の〝験〟があれば、それで十分なのだ、ということです。〝験〟を信じることのできない者は、たとえ何度その〝力〟を見せられたとしても、決してそれによって神を信じることはないのだ——と。わたしにとっては一度だけで十分でした。

◉あえて危険な道を選んで

わたしは今までに〝霊〟といったもの——低級霊域にしろ、神々にしろ——を見たという経験がありません。声が聞こえたということも、おそらくなかったはずです。

わたしの場合の〝啓示〟は、インスピレーションとして出てくる場合と、目の前の現象が〝動いて〟ある特定の方向を指し示す場合との二つのパターンで示されました。

そして前にも述べたとおり、このとき何度目かの〝魔境〟に入っていたわた

しは、わたしを導いてくれる〝大いなる力〟の存在を完全に信じ、その指し示す〝流れ〟にすべてを任せ切るという生活を始めたのでした。しかしその〝流れ〟は、常識的に考えたら自分では決して行かないような方向にわたしを導き始めました。しかしそのときのわたしは、自分の〝信〟を試されているのだと考えていました。ですから、むしろ喜んでその〝流れ〟に足を踏み入れていったのです。

もし、それが本当に〝禁断の道〟であるならば、必ず〝大いなる力〟が働いて、ストップがかかるに違いない。だから、その現象が起きない限り、たとえどんなに常軌を逸しているように見えようとも、わたしの選択は本質的に間違ってはいないはずだ。——と、完全にそう信じ込んでいました。

すでにタクシーの会社に勤めて一年半余りが過ぎ、借金の返済も順調で、あと二年弱で完全に清算できる見通しも立っていたのですが、その生活をわたしはあっさりと捨ててしまいました。そして、代わりに新しい二つの仕事を始めたのです。

一つは、完全歩合制の営業の仕事。——そして、もう一つは〝出張ホスト〟と

呼ばれている仕事でした。そしてこの仕事は、今までのわたしだったら絶対にやるはずのない仕事だったのです。

仏教の十戒の中にある〝不邪淫（愛のないセックスをしない）〟を、わたしは小さなころから当たり前のことだと思っていました。『遊び』だとか『浮気』という言葉が大嫌いで、それらに対して〝中途半端〟〝いい加減〟といった嫌悪のイメージしか持っていなかったのです。この〝出張ホスト〟に対しても「自分の体をけがす」という感覚でしか考えたことがありませんでした。ですから、この仕事の〝示唆〟を受けたとき、わたしにはそれなりの覚悟が必要でした。

しかし前にも述べたように、わたしはすでに子供たちに対して「必要とあらばどんなことでもしてみせる！」という誓願を立てています。そういう意味では、わたしの誓願が本物であることを証明できるいいチャンスだと思ったのでした。

ところが実際に動いてみると、もう一つの仕事との兼ね合いもあって、巡り合わせがうまくゆかず、なかなか仕事が入りません。

三カ月くらいの間に三つのグループに入会したのですが、結局は一度も仕事が成立しないままに過ぎてしまいました。中には入会金や会費を取るだけで、その後大したフォローもしていないという〝詐欺〟のような会もあったのです。

このままではらちがあかないと考えたわたしは、方針を変えて新宿区歌舞伎町にある『C』というホストクラブに勤め始めました。

◉ホストという仕事

この仕事だと夜の十時半から準備が始まり、午前零時から六時までが営業時間となるので、もう一つの仕事と時間もダブりません。休日はなく、一人前になるまでは一日休んだだけで即クビというシビアな世界で、時給（基本給）もかなり安く、最初のうちはなかなか厳しい条件に甘んじなければなりません。

最初は見習いとして、開店準備の店内清掃やウェイターとしてメニューを運んだり、灰皿や氷や水を新しい物と取り替えて洗ったりといった仕事が続きます。

そしてその間に先輩に名前を覚えてもらい、ヘルプとして使ってもらうところからホストの第一歩が始まるわけです。

何日か経つうちに、ホストという仕事の本質的なものが見えてきました。要するに、客に〝たかる〟のが商売なのです。そして不思議に思ったのは、どうしてこれらの女性たちは、たかられる、あるいは利用されるのを承知でこんなところへ足を運ぶのだろうか？ということでした。しかも客層は一般の人よりも風俗関係や同じ水商売の人たちが多かったので、よけいにそう思えたのです（今ならば、当時は気づかなかったいろいろな心の働きや要素が理解できるので、その理由がわかるのでしょうが……）。

わたしの後からも何名かの新人が入り、やがて彼らはいくつかあったグループの一つから〝お呼び〟がかかって、ヘルプとして利用されるようになっていきました。しかし、わたしにはどこからも〝お呼び〟がなく、依然として〝ウェイター〟を続けたままでした。

あるとき、その理由がわかりました。開店前にかかってきた電話の対応をしていると、突然途中から、

「お前はだれだ?」

と、相手がこちらの名前をしつこく聞き始めました。

「ただのウェイターですが。」

と答えると、

「俺だ、Nだ。」

という返事。Nさんはこの店の五本指に入るホストの一人で、特にこれといった派閥(グループ)を作るでもなく、どちらかというと一匹狼的な存在でした。

「お前のような立派な電話の対応をした奴を、俺は初めて見た。俺はお前が気に入った!」

そう言って電話は切れました。

そのNさんが、後でわたしに言うには、

「お前がもっと年が若かったら、いくらでも面倒を見てやったのにな。何で年をごまかして入ってこなかったんだよ。お前なら、二十三、四歳だと言っても十分通用したはずだろう?」

確かに、少し前までタクシーの運転手をしていて、「学生アルバイトですか?」とお客さんから聞かれることが度々あったので、自分が実際の年よりもかなり若く見られる傾向があることはわかっていましたが、別に自分の年をごまかす必然性を感じていなかったので、履歴書にはありのままに三十一歳と書いて出していました。

キョトンとして聞いているわたしに、

「だれだってお前、相手が自分より年上じゃあ遠慮があって使いにくいだろう?」

と、Nさん。

「年上って何のことですか?」

と聞くわたしに向かって、

「バカヤロー、俺は二十九歳だ！　ここにいる奴は、みーんなお前よりも年下なんだよ！」

と、あきれたように言い放つと、Nさんは控え室へと消えていきました。まさかNさんが自分よりも年下だとは思ってもみなかったわたしは、なるほどそういうわけだったのか、と自分の置かれている状況を納得したのでした。

◉同じことを繰り返せ！

結局一カ月ちょっとで『C』を辞めることになったのですが、昼の仕事も今一つ空回り気味で結果がなかなか出ず、このころすでにかなり経済的に苦しくなりつつありました。わたしには自分の生活費のほかに、子供の養育費八万円と借金の返済として四万五千円の支払いが月々のノルマとして課せられていたのです。

しかし、わたし自身は全くこれらの状況を心配していませんでした。というのは、この道に飛び込むときに、あらかじめ〝もう一度同じことを繰り返せ！〟と

いう示唆を受けていたからです。同じこととは、以前に仕事に失敗して経済的に追い詰められた状況を指します。わたしはそういう極限状態に再び追い込まれたときに、今の自分の〝大いなる存在〟に対する〝絶対的な信〟をどこまで保ち続けることができるのか、それをテストされているのだと考えていました。

たぶん、このころのわたしの生活の仕方を普通の人がやっていたら極度のノイローゼに陥って、発狂していたのではないでしょうか。ポケットの中の全財産が五十円玉一個という状況に追い込まれたことも何度かあります。そんな状態でいて、心は全く安定し、何の不安もわいてこない。そういう特殊な精神状態の〝記憶実践〟を、このころのわたしは続けていたのでした。

とはいうものの、わたしの心の中に一種の〝甘え〟があったことも事実です。つまり、どんなに苦しくなったとしても、最後には〝奇跡〟が起きて自分は救われる（何もかもうまく収まる）に違いない。それまでの辛抱なんだ、という甘え（期待）です。

つまり無条件の絶対的な信ではなかったわけです。ですから、その〝奇跡〟をあてにして、いくつかの詐欺まがいの行為をしてしまったのもこのころでした。一時的にだますようなかたちになっても、最後には十分フォローをすることができるはずだ、そういう確信を持っての行動でした。

しかし、この後も状況は二転三転し、ますます経済的に悪化していきます。さすがに、このままいったら〝夜逃げ〟をするしか方法はなくなるぞ、という危機感が出てきました。しかし、それは最悪の場合であって、とにかく今は自分なりの精いっぱいの工夫と努力をしよう、そう自分に言い聞かせてはみたものの、この〝夜逃げ〟という言葉はわたしの心の中で徐々に現実味を帯びていったのでした。

◉現世生活の崩壊

そして、もうこれ以上どうすることもできない、という状態にまで追い込まれ

てしまったとき、ついにわたしは決心しました。あと一週間が勝負だ。この間に打てる手はすべて打とう。そして、それでどうしてもダメならば、そのときはもう〝夜逃げ〟をするしかない、と。

親に事情を話して助けてもらおう、という気は全くありませんでした。第一、ここに至るまでの特殊な状況をいったいどうやって親に説明できるというのでしょう。いや、たとえうまく説明できたにせよ、わたし自身の身勝手なプライドがそういった行為を許しませんでした。だいたい相手がどういう反応を示すか想像はついています。そんな屈辱的な思いをするくらいなら、たとえ最後は一人寂しくのたれ死にしようとも、それまでのいっさいの現世的関係を断ち切って、〝夜逃げ〟でもした方がましだ！　と、本気でそう決心していました。

その夜は、よく晴れていて結構明るかったのを覚えています。東京近郊のK市にすでに安アパートを借りて、〝夜逃げ〟の準備は整っていました。レンタカーのワゴンを使っての引っ越しです。期待していた〝奇跡〟はとうとう起きずじま

いのまま、一週間が過ぎてしまったのでした。

肉親との関係も、これまでの友人たちとのつきあいも、そして何よりも別れた子供たちとの関係もこれで完全に終わってしまう。わたしは、今までの生活のすべてを捨ててしまうのだ。これで本当に、もう自分には〝世紀末の救済活動〟に全力を尽くす、という道しか残されていない。自分自身のアイデンティティーを、存在意義を自分自身に納得させるにはもうひたすらそれをやるしかない。

「――これは、自分にとっての〝出家〟なんだ！」

K市に向かってワゴンを運転する道すがら、わたしは何度も何度も自分自身にそう言い聞かせていました。

もちろん、〝夜逃げ〟をされる側からすれば、とんでもない戯言（たわごと）にしか聞こえないことは百も承知していました。なんて身勝手な奴なんだとだれもがそう思うはずです。しかし、単なる開き直りとしてではなく、わたしの心は不思議と落ち着いていたのです。

わたしは今までに数多くの失敗を繰り返してきました。そしてその度に失望し、落ち込み、再び気力を取り戻すまでに多くの時間を費やす、という行動パターンを取り続けてきました。しかし、あるときふと気づいたのです。それまで自分が失敗だと思っていた出来事が、実は自分では思ってもみないような全く別の側面を持っていて、自己形成に非常に重要な役割を果たしてくれていたんだ、ということに。

この認識は、わたしに強いショックとともに大きな転機を与え、そのとき心が瞬間的にチェンジするというダイナミックな経験をわたしにもたらしてくれました。それは、オセロゲームで黒いチップが次々とひっくり返って白一色になっていくときのような、一種の驚きに似た快感でした。

これは、子供たちとの別居によって一年近く死んだような生活を続けていた後で起きた経験なのですが、そのとき以来、わたしは単純に物事を成功・失敗と決めつけることの愚かさのようなものをずーっと感じ続けていたのです。ひょっと

したら〝本当の失敗〟なんて、この世の中には存在しないんじゃないだろうか、という予感めいたものがわたしの心の中に育ちつつありました。

◉〝夜逃げ〟の意味

ですから、今回の〝夜逃げ〟事件も思ったほどのダメージをわたしの心に与えてはいませんでした。奇跡が起きるだろうと期待したのはわたしの一方的な思い込みにしかすぎなかったわけで、この〝夜逃げ〟自体に何か深い意味があるのかもしれない。――いつしかわたしは、早急に判断のつかないことに対しては、「いったん棚上げにして、時間が解決してくれるのを待つ」というテクニックを身につけるようになっていました。そしてこの〝夜逃げ〟を境にして、わたしの何度目かの〝魔境的覚醒状態〟は終わりを告げたのでした。

そんな〝夜逃げ〟をした二日後、駅の近くの書店で『A宗管長、Kの正体！』という本を見つけました。発行日を見てみると出たばかりの新刊本です。そのと

きA宗にいまだに執着を持っていたわたしにとって、それはかなりのインパクトを持った本でした。

しかし、何でまたこんな時期にこんな本が出るのだろうか、と思わずにはいられませんでした。というのは、この〝夜逃げ〟に至るまでの経済的悪化によって、不本意ながらもわたしはA宗から離れざるを得ない状態に追い込まれていたのです。そして、それに追い打ちをかけるかのような内容の本が実にタイミングよく現われた、ということになります。

しかし、さすがにこの本の〝洞察〟を、わたし自身すぐに信じる気にはなれませんでした。なぜならば、わたしが〝大いなる存在〟と呼んでいたものは、当時のわたしにとってはA宗の本尊の〝加持力〟にほかならなかったわけで、その力がまさかA宗そのものを否定するような働きをするとは信じられなかったからです。

◉再び魔境的覚醒状態に

K市に少しとどまった後、わたしは神奈川県のIという駅の近くにあるパチンコ店で八六年の五月から住み込みで働き始めました。

これといった変化のない単調な生活がしばらく続き、夏が過ぎ、秋が通り過ぎてゆきました。——そして、再びわたしに劇的な変化の訪れる〝冬〟がやってきたのです。

十一月の途中から、店の若い同僚（十八歳）と一緒に、彼の行きつけのM市の繁華街にある『S』という居酒屋風パブに足を運ぶようになりました。店長やチーフたちとも仲良くなり、朝の六時までやっているということもあって、仕事が終わった後でも十分に楽しめる店でした。わたしの場合はお酒というよりも、その場の雰囲気や、そして何よりもカラオケが大好きだったのです。そして、毎晩のように出向いてカラオケを歌い、ストレスを発散させているうちに、わたしはなんと、再び例の〝魔境的覚醒状態〟に入ってしまったのでした。

そして、それと連動するかのように、今まで止まっていたわたしを取り巻く環境が再び大きく動き始めたのです。その引き金は、『S』のマスター（兼オーナー）からの誘いでした。

「どうだい、うちの店のマネージャーをやってみないか？」

魔境に入ったわたしは、ネアカで非常に社交的になります。極端な言い方をすれば、酒を飲まなくてもバカ騒ぎができる（！）という特技を身につけてしまうのです。マスターは、おそらくここ二カ月あまりのわたしの店内での行動をじっと観察していたのでしょう。

全部で四十人くらい入れる『S』という店を、わたしはかなり気に入っていました。この店でなら働いてもいいな、そう思ったわたしは二つ返事で承諾し、さっそく次の日からその準備を兼ねて午前零時から六時まで、『S』のカウンターでアルバイトとして働くことになりました。もちろん今までの仕事はまだ続けたままでです。

そして、一週間近くが過ぎたとき、とあるトラブルが起きました。あるクラブの女の子を挟んで、そのクラブに勤めている若い男の子とヤクザとの間にちょっとしたケンカが起きたのです。

「文句があるんなら表に出ろ！」

そう言い捨ててヤクザは外へ出ていきました。結局、わたしが二人の間に入って仲裁をしたのですが、問題はその次の日にやって来ました。

わたしが出店してカウンターに入って三十分くらいが過ぎたころ、突然四人の男が店内に入ってきました。そのうちの三人は一目でヤクザの幹部だとわかる相手でした。そしてその連中と連れだって、昨夜問題を起こしたTの姿がありました。

その場の雰囲気が一瞬にして殺伐としたものに変化しました。

「おい、この店でKって奴が働いているはずだ。そいつをここに呼んでこい！」

身長百八十センチくらいのプロレスラー風の海坊主がわめき立てました。Tが

こちらを見ながら、なにやら隣の金縁メガネの小肥りの男にささやいています。男たちの視線がわたしの方に集中しました。

普通だったらここで震え上がるところなのでしょうが、あいにくとこちらは〝魔境的覚醒状態〟の真っ最中です。このときのわたしは、周りで何が起きようとも全く動じない心の状態が形成されていて、〝恐いもの知らず〟になってしまっているのです。そしてわたし自身、全く思ってもみなかった行動をこの後で起こすことになるのでした。

◉三月ウサギの奇妙なお茶会

カウンターから出て近づいてゆくわたしに、

「おう、お前がKか。よし、奥に入れ！」

とニヤニヤ笑いながら海坊主が声をかけてきます。他の連中も口々に、

「奥に座れ！」

を連発していました。

よし、それほど言うならば奥に座ってやろう、と気軽に、

「じゃあ、ちょっと失礼します！」

と言って奥へ入ろうとした途端、すぐ左横にいた海坊主がすっとんきょうな声を上げました。

「こ、このやろー。こいつ、俺を押しのけて奥へ入ろうとしやがった！」

大きく見開いた目には驚愕の色が強く表われています。

後になって考えると、彼等がわたしに奥に入るように勧めたのは、そうすることによってわたしの逃げ道をふさぎ、心理的な威圧感をわたしに与えようとしていたことがわかります。ですから、わたしの計算外の行動にショックを受けたのでしょう。しかしそのときは、海坊主が何でそんなに驚いているのかピンと来ませんでした。

「図々しい野郎だな、お前なんか奥に入る必要はない！　そこで十分だ。」

パンチパーマのつり眼の男が、手前の丸い補助イスを指さして言いました。
「そうだ、そうだ。その椅子に座れ！」
海坊主がすぐに賛同の意を唱えます。
この手のひらを返したような態度の急変に、わけがわからずに眉をしかめていると、それまで黙っていた金縁メガネの小肥りの男がゆっくりと言いました。
「お前、昨日の夜、隣に座っているうちのTを脅してくれたんだってな。」
わたしには仲裁に入った記憶はあってもヤクザを脅した覚えはありません。わたしはキツネにつままれた気持ちで、斜め向かいに座って能面のように無表情なTをじっと見つめました。Tは一瞬たじろいだ様子を見せた後、左手の金縁メガネの小肥りの男にチラリと目をやると、すぐにまた元の無表情に戻ってしまいました。どうもこの〝金縁メガネ〟が相手の主犯格のようです。
ちょっとした沈黙の後、その〝金縁メガネ〟が口を開きました。
「まず、一つだけ聞こう。」

「？」
と、わたし。
「お前は、馬鹿か利口か、どっちだ？」
わたしはだんだん『不思議の国のアリス』に出てくる〝三月ウサギの奇妙なお茶会〟に出席しているような気分になってきました。そして、大きなため息を一つつくと、ゆっくりと答えたのです。
「さあ。――あんまり頭はいい方じゃないんじゃないっすか？」
その途端、でした。
「ああ、馬鹿じゃあ話相手にならねえ！　もう、お前はいいから帰れ！」
吐き捨てるように〝金縁メガネ〟が言うやいなや、他の連中からも、
「もういいから帰れ！」
「早く帰れ！」
の、カエレコールの連発です。わたしはだんだん腹が立ってきましたが、カウン

ターの奥で心配そうに見ていた店長が、ここぞとばかりに手招きしています。わたしはゆっくりと腰を上げると、カウンターの裏手にある控え室へと向かいました。

◉怒りのエネルギー

今度の〝魔境的覚醒状態〟の今までと違った大きな特徴は、非常にラジャスなエネルギーを伴っているということでした。わたしの心には昔から非常に冷めた部分があって、怒りに我を忘れる、だとか、本気になって怒る、ということがほとんどありませんでした。

もちろん今回にしても自分を見失うようなことはなく、その怒りのエネルギーに乗っかるというか、それを利用して自由奔放に演技している自分と、それを隅っこで面白がって眺めているもう一人の自分がいる、といった分裂した意識状態が続くのです。ですから、途中でやめようと思えばいつでもやめられる（実際に何

度かテストをしてみた)、そんな余裕の伴った状態で、本気になって怒っている、という経験を何度もしました。

そして、カエレコールに送られてわたしが控え室に戻ってきたときに、この怒りのエネルギーがあふれ出してきたのです。

「ふざけやがって! あいつら、いったい何組だ?」

近くに立っていた太めのチーフに、わたしは大声で怒鳴りました。まだ客席に座っていた四人にも十分聞こえたはずです。

チーフは頬を一瞬ひきつらせた後、プイッとそっぽを向くと言いました。

「知らねえよ。そんなの、お前の知ったこっちゃないだろうが!——そんなことより、いいから早く帰んなよ!」

「知ったこっちゃないなら、そっちこそ黙ってろ!」

控え室の中で思いっきりわめき散らした後、わたしは『S』を去りました。歩きながら、ひょっとしたら四人組が怒って後を追ってくるかな、と期待していた

のですが、やはりその気配はありません。わたしにはその理由がほぼ理解できていました。前にも述べたように、魔境に入ったわたしには相手の心の動きが読めるときがあるのです。

◉約束を果たす資質

次の日はちょうど休みに当たっていました。そして、その日の朝から、わたしの心に（どうしてもTともう一度会わなければならない！）という思いがどんどん強くわいてくるようになりました。わたしは、この〝流れ〟に身を任せることに決めました。

トラブルの発端となった女の子から、Tの行きつけの店（雀荘、その他）を何件か聞き出し、まずそこを当たってみることにしました。そして、結局そこにはいなかったものの、Tの所属する事務所の電話番号を聞き出すことができたのです。

K組。ここ、東京都下の中堅衛星都市、M市の中にいくつかあるK系の組織（グループ）の中でも、最も活動的な組織であり、去年の暮れに『乱射事件』なども起こしている。昨日Tと一緒に来たのは、その中のナンバーツーとスリー、そして若頭だった——という情報も、一応得ることができました。

二、三回ほど呼び出し音が鳴った後、すぐに電話がつながりました。最初からTが電話に出たので、これから会いたい旨を伝えると、今日は当番で事務所から抜けられないと言います。最初から驚いた様子がないところをみると、おそらく雀荘のマスターあたりから情報が流れていたに違いありません。

「そうか。じゃあこれからそっちに行くから、場所を教えてくれる？」

一瞬の沈黙の後、おずおずと場所を教えるTの声を聞きながら、わたしは手帳にメモを取ってゆきました。なんと、K組の事務所は、『S』から五分と離れていない場所にあったのです。

一階が不動産屋になっている七階建てほどのビルの五階に、Tの事務所はある

ということでした。そして、道路を挟んだビルの向かいは駐車場になっているはずでした。

道を歩いて行くと、確かに言ったとおりの場所に着きました。——しかし、下に出て待っていると言ったTの姿が見えません。五階の窓を見上げると、重そうなカーテンで被われています。その端っこが、時々微かに動くのがわかりました。

わたしはあきれたように苦笑をするとビルの中へ入って行き、ゆっくりと階段を上り始めました（エレベーターはなかったのです）。

普通の人だったら、こんな火の中に飛び込んでいく虫のようなまねは、絶対にしないに違いありません。しかしわたしには、これでいいんだという妙な確信がありました。

このとき、ふと昔見たヤクザ映画の一場面がわたしの脳裏に浮かんできました。それは『兄貴から拳銃をもらった主人公が、初めてそれを使うために目的地へ向かう途中、心を落ち着かせるために口笛を吹こうとするが、口が震えてうまく吹

けない。そしてコマ落としふうに時が過ぎて、今度は、すっかり場数を踏んだ主人公が、悠々と口笛を吹きながら仕事に向かう』という映像表現（モンタージュ）でした。

わたしも試しに口笛を吹いてみました。すると、自分でも惚れ惚れするような、素晴らしい音色が出てきたのです。

このとき、わたしは確信しました。わたしは、それが本当に必要であるならば、たとえどんなことでも瞬き一つせずにやってしまうだろう——わたしは、子供たちとの約束を果たせる資質を備えている、と。

口笛はいつしか鼻歌に変わり、わたしは上機嫌でTの待つ事務所へと向かったのでした。

◉もう一人の自分

「なあ、もうお互いに、この話はなかったことにしようや。」

事務所から慌てて出てきたこのTの一言で、事件はあっけなく幕を閉じました。

わたしとて別に異存はありません。

帰る途中、開店前の『S』に立ち寄ると、ちょうどマスターが来たところでした。

「お前なぁ、昨日はあれから大変だったんだぞ。」

わたしが帰った後、すぐに呼び出しを受けて駆けつけたマスターに、ヤクザの幹部たちは、

「俺たちの目の黒いうちは絶対にあいつをここでは働かせない！　もしどうしても働かせるつもりなら、この店を潰してやるぞ！」

と、息巻いたというのです。

「へえ、そうなんですか。」

と、まるで他人事のように聞いているわたし。

「しかし、だからといって打つ手がないわけではない。ヤクザなんて、金さえ出せばどうにでもなる連中なんだ。だから今回のトラブルだって、俺がその気になっ

たらあっという間に解決しちまうんだよ。」

マスターは笑って言いました。

しかし、話を聞いているうちに、相手の態度が鼻についてきました。妙に恩着せがましいのです。プライドの高いわたしにとって、ムッとせずにはいられません。

「ああ、でもそのことなら、さっきTと会って、きちんと話がついていますから。」

マスターの目が、一瞬つり上がり、顔に赤味がさしてきました。

「なんだとォ、おもしれぇじゃねえか。なんだったら電話して〝恐いお兄さん〟たちを呼んでやってもいいんだぞ！」

「別にそれは構いませんけど、本当に話はもうついているんですよ。」

「なにお！」

最初はなかなか信じようとはしなかったマスターも、わたしの説明を聞いているうちに、納得せざるを得なくなりました。しかし、このお蔭でわたしの『S』

への就職の可能性は、完全になくなってしまったのです。

実は、これは後でわかったのですが、マスターは昔、K組の連中の事務所にさらわれた経験があるのです。彼以外にもこうした苦い経験を持っている水商売の人たちを、わたしはこの後で何人も知りました。さらうのは海坊主たちの常套手段だったわけです。ですから、わたしのなした行為は、過去に傷を持つマスターのプライドを完全に傷つけてしまったのでした。

「俺はなぁ、お前より、年上なんだぞ！」

それが、マスターがわたしに言った最後の言葉でした。

この後、何度かTと同じ店で飲む機会があったのですが、そのときのわたしは完全に相手を呑んでしまっているのです。そして、自分でも思いもよらない言動を瞬間的にやってしまい、それがまた相手に電撃的な反応を引き起こすのでした。実際、もう一人の自分が心の中にいて、その自分は、この手の連中の扱い方をよく知っている、という感じでした。

わたしは、小学校の低学年までを除いては、殴り合いのケンカなどしたことがありません。武道にしても本を読んで空手のまねごとをちょっと自分勝手にやったくらいで、こういった連中とは今生では全くの無縁のはずなのです。ひょっとしてこれは、前生の記憶なのかもしれません。わたしは彼等に対して、奇妙な親近感を感じることが時々あるのですから。

——ともあれ、結局わたしのとった今回の一連の行動は、すべて『S』への就職をつぶす方向へと動いたのでした。

◉『マハーヤーナ』に出合う!

この事件があった後、わたしは周りから〝あぶない奴〟だと言われるようになりました。ですが、確かにわたし自身、正直言って自分がどういう行動を次にとるのか、全く見当もつかないわけですから、何と言われても仕方がありません。

この後、オウム真理教と出合うまでの約一年間、わたしは新しく二軒のパチン

コ屋に勤めることになるのですが、一軒目は、入社してからたったの十日目で「主任」に任命されてしまいました。まあ、これにはいくつかの事情があったのですが、お蔭でわたしは海千山千の従業員を相手に何カ月かを悪戦苦闘（といっても、魔境のわたしはこの状態をかなり楽しんでおりましたが）することになりました。

従業員は、中年の場合は人生に失敗してどこか心が屈折しており、若者は人生のはねっ返り者、そして中には空手ダコのごつい手をしたS連合系の元ヤクザまでいたりしました。しかし、このときのいろいろな経験と試行錯誤は、わたしにとってとても良い勉強になったのでした。

そして、その後も事態は二転三転し、八七年の春には、わたしは再び都内に戻ってきていたのです。

上野に近いU駅のすぐ近くに、その店はありました。今まで勤めたパチンコ店の中では一番客層が悪く、トレーナー姿の中堅ヤクザが主として幅をきかせてい

たのです。そして、その昔、その店にいた生意気な主任が、ある夜闇討ちに遭い、半殺しの目に遭わされたというまことしやかなうわさが、従業員の間でささやかれていました。

わたしはこのヤクザを半年くらいで追い出してしまいました。別に相手を脅したわけではありません。彼を特別扱いしないで、みんなと平等に扱ってあげただけなのですが、プライドを傷つけられ心の屈折してしまった彼は、自然と店に来なくなってしまったのです。

店内でのトラブルがめっきりと減り、平穏な日々が続くようになりました。時間の余裕が出てくると、いろいろと考えるようになるもので、いつまでもこんな生活を続けていても仕方がない。そろそろ本気になって、〝救済〟に向かって一歩でも前進できる落ち着き先を探さないといけないな、と考えるようになりました。

そして、このころ、わたしは店から寮に帰る途中にある、本当に小さな書店の

棚に『マハーヤーナ』創刊号（オウム出版刊）を見つけたのでした。

正直言って、最初に受けた印象は「素人っぽい同人誌のような作り方だな」という、内容とはあまり関係のないものでした。本文に関しては、いまだにA宗の影響が強く残っていたわたしにとって、すぐには信じ難いものがありましたが、オウム真理教という団体にかなりの興味を持つようになっていったのは確かでした。

◉入信、そしてすぐに出家！

わたしがオウム真理教への入信を決心した直接のきっかけは、十一月初旬に東京で行なわれた「アストラルワールド音楽コンサート」を聴きに行って踏ん切りがついた、ということがいえます。

それまでは、『超能力秘密の開発法』『生死を超える』『イニシエーション』と、尊師の本を読み進んできてはいたものの、今一つ中へ入っていくきっかけをつか

めずに逡巡していたのでした。

八七年十一月十六日に入信し、尊師のシャクティーパットを一度受けた後、わたしは十二月二十六日（第一回目の〝狂気の集中修行〟の初日）に出家をすることができました。

しかし、このころのわたしは〝救済活動〟を強く求めてはいたものの、グルに対する信も帰依も全くできていませんでした。正直言って、最初は一時的な〝腰かけ〟としか考えていなかったのです。もし、オウム真理教よりも、もっと一生懸命に〝救済活動〟をやっている団体があったならば、わたしは迷わずにオウムを捨ててそちらのグループに移るつもりでいました。

わたしは、わたしが子供たちに対して立てた誓願を最大限に成就させてくれる団体を探していたのです。そしてこのころはまだ、オウム真理教がその団体であるという確証をわたしは持っていませんでした。

◉不肖の弟子

ですから、今から思えばとんでもないことを、当時のわたしはしています。例えば、元タクシードライバーということで「尊師の運転手が入ってきたぞ」と周りの弟子の方たちがささやき合っているのを尻目に、編集への所属を希望したり（今のわたしでしたら、尊師の近くに行けるというので、大喜びでその話に飛びついていたでしょう）、当時の編集・デザインの生活の拠点だった上町に住み始めたころ、尊師からの電話を受けて、

「どちら様でしょうか？」

と聞き返してしまい、

「なんだ、わたしの声がわからないのか？」

とあきれられてしまったりといったミスをしてしまいました。

もちろん、尊師はわたしのこの心の内をよくご存じで、最初の面談のときに、

「今までの生活より、少しはましだろうと思って入ってきたんだろう？」

とズバリと言われてしまい、返す言葉がなくて冷や汗をかきながら絶句しているわたしに、笑いながら、

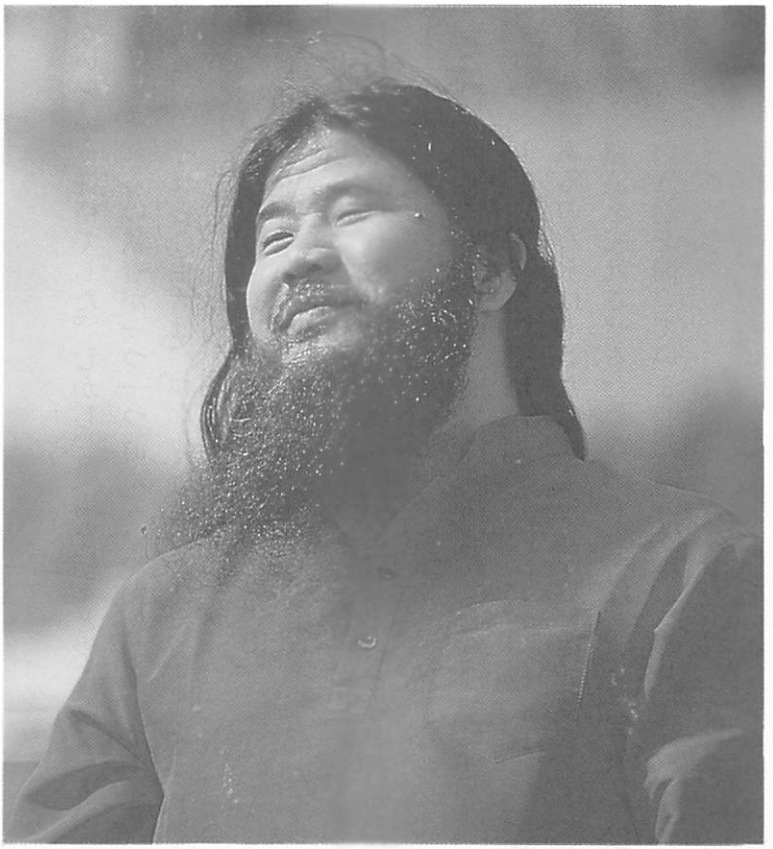
「まあいい。今までのことは今までのこととして、これからしっかりと頑張りなさい。〝過ぎてしまえばすべては幻影〟なんだからね。」

と、優しくおっしゃってくださいました。

その後、一カ月ちょっとでデザイン班が忙しいというのでデザイン班に移り、マハー・カッサパ師の下で『マハーヤーナ』その他のレイアウト、デザインのワークに専念するようになりました。

サマナになった多くの人たちが感じる現世生活と出家生活のギャップを、わたしは全く感じることがありませんでした。オウム真理教に入るまでの二年弱の間に経験した、パチンコ店をはじめとする何種類かの〝住み込み〟生活は、それまでわたしの持っていたいくつかの執着を取り除いてくれていたのです。

それまでのわたしは、自分の空間や机や本に執着し、それが身近にないと心が



落ち着かないという性格でした。しかし、職場を転々とする度に、机が消え、本が減り、自然にそれらの執着が一つ一つ消えていったのです。ですから、オウム真理教に入る前のそれらの生活は、わたしにとってはとてもいいウォーミングアップになっていたのです。

◉ヤソーダラー願望

わたしは、オウム真理教の説く〝天界転生〟に対してほとんど興味を持っていませんでした。高い世界に転生したい、といった気持ちが希薄なのです。

何度でもこの人間界に生まれ変わって〝救済活動〟を続けていきたい——それがわたしの願いでした。人間界こそが苦と楽のバランスが最も良く、一番修行に入りやすい環境であるのならば、わたしはこの人間界に何度でも生まれ変わりたい。そして、その願望を成就させるための一つの手段として、チベットでは〝妻帯〟を利用するという話を聞いていました。

それと同時に、わたしには〝ヤソーダラー願望〟というものがあって、サキャ神賢とその妻ヤソーダラーとの関係を、わたしはとてもうらやましく思っていたのです。

『原始仏典』には、サキャ神賢とヤソーダラーとのロマンチックな出会い（だとわたしは思いました）が描かれています。

四アサンキャ十万カルパの昔、ディーパンカラ真理勝者の時代に結ばれた縁によって、何千億回となくサキャ神賢と共に、素晴らしい〝魂のパートナー〟として転生し続けたヤソーダラーに、わたしは限りないあこがれを抱いていました。そして、そのような魂に、わたしもいつか出会えたらなあ、と心の中で思い続けていたのでした。

ところが、これらの思いが翌年の夏にわたしをとんでもない状態へと向かわせてしまったのです。——わたしは、ある女性のサマナに執着してしまったのです。わたしはもともと自分の感情や心の揺れを他人に知られるのを好まず、ポーカー

フェイスが得意でした。要するに、プライドが高いのです。ですから、いきなり尊師に呼ばれ、その問題をズバリと指摘されたときには、尊師の持つ神通力のすごさを感ぜずにはいられませんでした。そしてこの直後から、執着を落とすための尊師のマハー・ムドラーが始まりました。

◉性欲の落とし穴

「お前は巻き込まれているんだ。」

と、そのとき尊師はおっしゃいましたが、当時のわたしには、その意味がよく理解できませんでした。しかし、後になって客観的に見つめることができるようになると、おっしゃっていた意味がよくわかるのです。

彼女はかなりの性的魅力（セックス・アピール）を持っていて、自分でもそのことをよく心得ているところがありました。わたしの心は、結局、触発されて生起した自分の〝性的欲求〟を満足させたいがために、自己の持っていた〝ヤソーダラー願望〟と〝人間

界転生願望"をうまく利用して、その欲求を正当化しようとしていたのでした。つまり、相手に対する執着というよりも、自分の中に生起した欲望に対する執着だったわけです。

"修行者"として尊敬でき、お互いを向上させていこうとする信頼関係を結び合える相手である、というのが、わたしがまだ見ぬ相手に対して抱いていた最も基本的な条件であったにもかかわらず、その想いが本末転倒し、単なる性欲を肯定するための道具になってしまっていたのだという認識は、わたしに大きなショックと教訓を与えてくれました。

とはいえ、これはかなり後になってから持てるようになった認識であり、当時のわたしは、それが相手に対する執着だと思い込んでいたのでした。

オウム出版の書籍の中に、『マンガ・滅亡の日』という本がありますが、これを描いていたころが尊師のマハー・ムドラーの真っ最中で最悪の状態でした。ただ、そういう心の状態に左右されてワークができなくなる、ということはありま

せんでした。たぶん、周囲のほとんどの人が、わたしのそういう精神状態に気づいていなかったと思います。

◉タントラ・ヴァジラヤーナの教え

そんなボロボロの心の状態で『マンガ・滅亡の日』を描き上げた後、しばらくして、わたしは富士山総本部道場に呼ばれ、六百時間をノルマとした立位礼拝の集中修行に入りました。四十日近くかけてなんとかその加行を果たした後、成就を目的とした瞑想修行へ入るための準備として、ヴァヤヴィヤその他の新しい修行メニューに取り組み始めたある日、尊師の説法が行なわれたのでした。

それは、今までとは全く違った新しい内容の〝教え〟でした。その新しい中身が明らかにされていくにつれて、わたしの心の中に激しい驚愕がわき起こってきたのです。これは、わたしが今まで探し求めていた幻の〝教え〟そのものではないか！——いえ、わたしはそのような教えなど探してはいませんでした。とい

うよりも、宗教というカテゴリーの中に、このような考え方をする教えが存在するなんて考えられなかったのです。

まさに、頭を思いっきり強く殴りつけられたときのような激しいショックを受け、茫然となっているわたしの心の中で、もう一人のわたしが大喜びして叫んでいました。

(ここには、わたしが今まで求めてきたすべてのものが備わっている! ここがわたしの真の目的地だったんだ、ここがわたしのゴールだったんだ!)と。

もちろん、わたしがそれまで考えてきたことと、タントラ・ヴァジラヤーナとでは根本的な違いがあります。タントラ・ヴァジラヤーナの場合は、完璧な利他心から行動が生起しますが、わたしの場合は、過去に積んだ悪業の一番早い清算方法として、また、傷ついた自己の存在意義(アイデンティティー)を自分自身に証明するための最後の手段として、「自分にとっては不利益となるが、他の人には大きな利益となる行為・行動を選択する」ことを考えていたわけですから。

しかし、この教えこそが、今の自分に最も必要な教えなんだ、という目のくらむような激しい渇望がわたしの中にあふれ出してきたのです。

◉プライドが許さない！

その修行は、突然のグルの指示によって一週間ちょっとで終了し、わたしは再びデザインのワークに戻りました。

修行の成果か、再び彼女と同じ部署になっても心は小康状態を保っていました。そしてこのころ、彼女の心に大きな変化が生じていったのでした。

新人サマナのK君に、彼女の関心が移ってしまったのです。まさに、〝心は無常なり〟だったわけですが、そのとき、わたしの心の中にK君に対する嫉妬の念が生じてしまったのです。

この自分の心に気づいたときはショックでした。というのは、わたしはそれまで、そういう男女間の〝嫉妬心〟ほど醜いものはない、と思っていたからです。

その、最も自分の嫌いな醜い心が自分の中にある！　これはわたしのプライドに大きな衝撃を与えました。そして自分自身がそういう心の状態であり続けることを、わたしのプライドが許しませんでした。

こんな醜い心を持つくらいなら、〝執着〟なんか綺麗さっぱり捨ててやる！　よし、これから自分は二人の様子を見つめていこう。そして、それで全く動じない心を作ってやる！――そう決心しました。そして、その瞬間、〝執着〟の八割くらいが自分の心から落ちていくのを感じました。

このころ、デザインのリーダーであるマハー・カッサパ師の不在が多くなり、わたしがその代理を務めなければならないような状況になりました。このときは、自分の持つ〝愛情欲求（他からいい人だと思われたい）〟をいかにつぶしてゆくか、ということを考えるようになりました。

他から良く思われたい！　という心が強いと、本当はもっとこうしなければいけない、という状況があったとしても、相手から嫌われたくないがために、それ

を言えない、あるいはできない、という〝慣れ合い〟が生じます。この状況をつぶすためには、嫌われても憎まれてもそれに動じず、いいものはいい、悪いものは悪いとはっきりと言い切れる心の強さを培う必要があります。

ですから、まず、人から嫌がられることに心が動じなくなるための訓練を意図的に行ないました。つまり、相手にわざと嫌がられるような厳しい言い方をしたり、タマスが原因でワークに遅れが生じているときは、怒鳴りまくってその状況を変えていったり、というふうに。これをやったがために、デザインのチームワークはガタガタになったと思いますが、わたしは、タマスよりはラジャスの方がいいと思っていました。

このころ、マハー・カッサパ師がみんなを集めて次のように言ったことがあります。

「わたしたちのワークは、グルの意思を実践していくことが最も大切なのであって、その部署内の人間関係がボロボロになろうがどうなろうが、はっきり言って

そんなことはどうでもいい。デザインという部署に一番必要なことは、締め切りを遅らせない、ということだ。ナーギタに対するいろいろな不満が出てきているようだが、少なくともワークが大幅に遅れたりといった問題はなくなってきている。この点は評価すべきだとわたしは思う。」

と。

◉思い込みの崩壊

この後、あるエピソードを知ったことから、それまでわずかに残っていた〝彼女〟への執着が、完全になくなりました。

わたしは、彼女の本当の姿をありのままに見ていず、自分勝手な思い込みから来るイメージを作ってしまっていたのです。そして、彼女の本質を理解する〝キーワード〟を見つけたとき、どうして自分がそういう間違った思い込みをつくってしまったのかという理由、そして、それまで彼女から聞いていた昔のいくつかの

エピソードが、どういう原因から生起したのかという理由、そして、現在彼女に生じている欠点がどうして生じているのかといった理由等がスーッと理解できたのでした。

終わってみれば、いい経験をしたなと思えるわけですが、やはりそこへ行き着くまでの様々な心の葛藤が、〝心の修行〟ということになるのでしょう。

◉下向の危機

それからしばらく経ったころから、わたしは、自分自身に危険なものを感じるようになってきました。時々、現世に帰る修習をしてしまうのです。

原因はわかっていました。〝プライドの屈折〟です。わたしは、出家修行者としては、かなりの古手に属します。ところがそのころは、わたしより後に出家した人が、修行に入ってどんどん成就していっていました。ところが、自分にはいつまで経ってもそのチャンスが回ってきません。

もっとも、このころのわたしは、救済願望は強くても、成就願望はほとんどありませんでした。というよりも、わたしにはオウム真理教の説く〝成就〟の内容がピンと来なかったのです。少なくとも自分の求めている〝成就〟とはちょっと違うな、という印象がありました。

わたしが本質的に求めていたものは〝霊性〟ではなく〝智慧〟でした。ですから、ダルドリー・シッディが起きてほしいなどと思ったことがなく、正直言ってそんなのはどうでもいいと考えていました。

また、アストラル・トリップによる高い世界の経験、低い世界の経験もしたいとは思っていませんでした。というのは、もし自分が地獄の経験をして、それに対する恐怖が出てきたら、わたしが立てている〝必要とあらば、地獄に落ちても構わない〟という誓願があっさりと崩れてしまうでしょう。また、天界の素晴らしい世界を経験してしまったら、やはりこっちの方がいいやということになるかもしれません。

本当は、両方の経験をしっかりとした上で、〝必要とあらば、地獄に落ちても構わない〟と言い切れるだけの心の強さが必要なのでしょうが、まだわたしにはそこまでの自信を持ち合わせていませんでした（今では〝霊性〟と〝智慧〟は切っても切れない関係であるということが理解できますが、その当時は、両者は全く異なるカテゴリーに属するものだと考えていたのでした）。

別に成就なんてしなくてもいいや、という心とは裏腹に、どんどん後輩たちが成就してゆくという状況は、最初はそれほど気にならなかったものの（というのは、わたしはかなりうぬぼれが強くて、クンダリニー・ヨーガの普通の成就者程度なら、ワークにおいても問題処理能力においても自分は決して負けはしないぞ、という〝慢〟を持っていたのです）、その状況が続いていくにしたがって、心に焦りが生じてきました。

わたしは、もし自分がオウム真理教から離れて現世に戻る可能性があるとしたら、〝プライドの屈折〟から来る〝卑屈さ〟が自分を支配したときだと、前々か

ら考えていました。その恐れていた心の状態に、近づきつつあるという焦りが生じてきていたのです。

いたたまれない焦燥感がわたしを襲うようになりました。

わたしは〝夜逃げ〟をしてからオウム真理教に出家するまでの間に、自分のなした〝不義理〟を修復しようと考えたことが何度かありました。しかしその度に、いや、このままでいいんだ！　という妙な確信めいた気持ちがわいてきて、二の足を踏んでしまっていたのですが、この〝いたたまれない焦燥感〟がわたしを襲ったときに、現世が完全に崩壊し、戻るところがないという状況が、わたしを〝下向〟への誘惑から救ってくれていたのでした。

◉アニメチームを作りなさい

やがて、突然「映画を作るぞ！」という話が持ち上がりました。『死』をテーマとした映画を作りなさい、という神々からの示唆があったというのです。そし

て、この中で、アニメーションでなければ表現できない部分があるので、この際だから、アニメチームも作ってしまおう、というグルのご指示でした。

この話はその後二転三転し、やがてダンス・オペレッタ『死と転生』として実を結ぶことになるわけですが、とにかく、アニメチームをどうやって作っていったらいいのか、という難問にわたしは頭を抱え込んでしまい、下向の修習どころではなくなってしまったのです。周囲の人たちは、アニメとマンガを似たようなものだと思っていたようですが、本質的な違いがかなりあるのです。そしてアニメに関しては、わたしは全くの素人でした。

現世にいたころ、アニメの専門学校に通っていた友人が何人かいて、彼らは二年間かけてアニメを学び、最後に卒業製作としての〝作品〟を作るのですが、その作品のレベルはやはりプロが作ったものとは全然違う、という話を聞いていましたし、わたしの結婚相手がアニメーターとして一人立ちしていったのも結構時間がかかっていたように記憶しています。

これは、大変なことになったぞ！　果たして、本当にアニメのチームなんて作れるんだろうか？　ともすれば、そんな疑念が頭をもたげてきます。――しかし、グルの意思は絶対です。いろいろと考えたあげく、これはもうひたすら念じるしかない、という結論に達したのでした。

毎日寝る前に、十五分から二十分かけて、わたしは心の中で必死に思念し続けました。

（グルの意思を実践できますように！　グルの望みがかないますように！）

◉グルの神秘力

このころから、尊師に身近に接することができるチャンスも徐々に増え、そして近づけば近づくほど、グルの偉大さ、奥の深さといったものを強く感じるようになっていきました。そしてようやく、本当の救済活動とはどういうものなのか、また、今までの自分の活動に、いったい何が足りなかったのかが理解できるよう

になりました。

救済活動に絶対なくてはならないもの、それは〝救世主〟の存在でした。そして、〝救世主〟の意思を実践し、その願望を成就させていくこと、これこそが真の救済活動にほかならないのだ——と納得がいったのです。

結局これは、グルがわたしに与えてくださった〝観念崩し〟の修行だったように思えます。サマナの中には、プロとしての経験者こそいなかったものの（途中から経験者も入ってきた）、優れた人材が探せばいるもので、作画、背景、絵コンテ等の各セクションの核となってくれるような人が次々と見つかり、また、科学班の協力によって、コンピュータを使った作画の〝動き〟のスピーディーなチェックが可能になり、それまで悩んでいた問題点のほとんどが解決できるめどが立ったのです。

グルの持つ、〝その人の潜在的能力を把握する力〟を何度かこの目で見ることもできました。この、グルからの適切なアドバイスがなかったならば、わたしは

貴重な戦力をわたしの無智によって生かすことができず、MAT（マンガアニメチーム）が軌道に乗るまでにもっと多くの時間がかかってしまったに違いありません。

真のグルの持つ偉大さは、弟子がその人に近づけば近づくほど、その良さ、素晴らしさがわかり、「ああ、この人はわたしたちにとって、本当にかけがえのない大切な人なんだな」という想いが強くなっていく、というところにあるのではないでしょうか。

普通は、その人に近づけば近づくほど〝粗（あら）〟が見えてくるものです。例えば、わたしが昔帰依していたK氏に信を持ってK食品（A宗の関連会社）に就職したある人など、忘年会の二次会でディスコに行ったときに、酔っぱらって醜態を見せているK氏に幻滅を感じ、A宗をやめてしまったそうです。A宗に限らず、真のグル（救世主）を持たない集団は、必ず内部分裂や派閥争いというかたちで、次第にその欠陥や矛盾が現象化してゆくのではないでしょうか。

◉ようやく修行に……

その後も、いくつかの小さなトラブルはあったものの、MATのワークは順調に進み出し、『輪廻転生』をはじめとして『超越神力パート1』『ガティーカーラ経』といった作品が生み出されていきました。

そして、『創世期』の制作の半ばでわたしは修行に入ることになり、尊師にインド・ギッジャクータ山での経行頭陀修行へ連れていっていただくことができました。

このときは、途中で脱水状態になって点滴を受けたり、顔の右半分にジンマシンができてかさぶたになってしまったり、といった〝カルマの解放〟を経験しています（残念ながら神秘体験はありませんでした）。

帰国後は、『創世期』に遅れが出ているということで再びワークに戻り、――そして、九一年十二月十三日、クンダリニー・ヨーガの成就を目指す修行に入ったのでした。

第二サティアンビルの二階に四十名ほどの極厳修行者がピックアップされ、一日十時間の詞章、六時間の調気法、四時間の経行、三時間の究竟の瞑想、一時間のイニシエーション（お供物の供養）というスケジュールをこなす毎日が始まりました。

わたしはこの中で、究竟の瞑想がとても苦手でした。というよりも、蓮華座がほとんど組めなくてそれどころではないのです。修行に入る前は一時間ぐらいは楽に組めていた蓮華座が、ここでは五分と持ちません。ですから、最初の一、二カ月は蓮華座の苦痛との闘いでした。

◉ダルドリーが起きない！

成就の決め手は〝四つの体験〟をすることですが、その第一番目に来るのが〝ダルドリー・シッディ〟です。わたしは四年間のサマナ生活において、このダルドリーが起きたことがありませんでした。――というよりも、前にも述べたよ

うに〝起きなくったっていいや〟という修習を何度も何度も繰り返していたわけですから、起きるわけがなかったのです。

つまりわたしは、それまでに積み重ねてきた否定的想念〝起きなくったっていいや〟の、願望成就をしていたのでした。ですからその状態が、極厳修行に入ったからといってすぐに変わるわけがなかったのです。

わたしはもともとプライドが高く、ワークにおいても人よりも優れているというぬぼれ持っていました。ところがこのダルドリーに関しては、全くの劣等生だったわけです。他の人たちは結構簡単にダルドリーが起きているのに、自分にはその兆候すら現われません。いくらヴァヤヴィヤをやっても、クンバカの長さは伸びるけれど、振動すら起きないのです。このころ、単純なプーラカのクンバカは最高で六分四秒を記録しました。

日が経つにつれて、わたしのプライドは屈折の度合いを増し、その裏返しである〝卑屈さ〟が強くなっていきました。

すっかり意気消沈してしまったわたしは、修行に対する意欲をなくしてしまい、なんと下向の修習をするようになってしまったのでした。

このとき、ヤソーダラー正大師を通じて、尊師よりロシア救済ツアーへ参加するようにというお話がありました。

「ロシアで見聞を広めて、今後の救済活動の糧とするように。修行は帰ってきてから、焦らずにまた一からやり直せばいいじゃないか。」

というご指示だったわけですが、これは尊師のわたしへの〝哀れみ〟以外の何物でもありません。そして、このグルの大いなる哀れみによって、わたしの心はこのひどい状態から抜け出すことができたのでした。

◉無常は苦か?

帰国後、再び修行三昧の日々が始まりましたが、今度は落ち込むようなことがなくなって、わりと淡々と修行をこなしていけるようになりました。これは、尊

師からいただいた捨断用秘儀テープ『三つの慢』が大きな効果を与えてくれたと思います。

そして、ようやく待望のダルドリーが究竟中に起き、第一ステップをクリアーできたのでした。それから、光の体験や意識の分化といった経験もだんだんとするようになり、八月の中旬には尊師より、

「ほとんど白のバルドーに、緑と黄色が少し混じっている。あともう少しで、完全に神々の意識にチェンジするぞ、一カ月以内に成就できるだろう。」

というアドバイスをいただくことができました。

ところがその三日後から、尊師の運転手の一人として、各支部に同行することになってしまい、それからというもの、ひと月の半分以上がワークという状態になってしまいました。

このころから、経行中などにいくつかの疑問が浮かんでくるようになりました。例えば、無常って、本当に〝苦〟なんだろうか？　という疑問がどんどん強く

なってくるのです。

（――無常とは〝あらゆるものは変化する〟ということだ。すると、その変化には三つのパターンがあるはずだ。つまり、良い状態が悪化していくという〝下向〟の変化。今度はその逆に悪い状態が良くなっていく〝上向〟の変化。そして最後は〝現状維持〟という変化しない変化の三つだ。

そこで問題なのは、この〝変化〟がランダム――つまり、全く偶発的にデタラメに起きてしまう変化なのか、それとも一定の法則に基づいた秩序のある〝変化〟なのかということではないのか。もし全くのデタラメならば、〝無常〟は完全な〝苦〟以外の何物でもないだろう。しかし、もしそれが秩序のある変化であるならば、その法則性を理解さえすれば、コントロールは可能なはずだ。そして、その場合〝無常〟は本質的に〝苦〟ではあり得ない。仏教ではこの変化の法則性を説いており、それが、カルマの法則と条件生起の法則ではないのか。）

――つまり、〝無常〟そのものは〝苦〟でも〝楽〟でもない。法則に対する無

智によって〝苦〟が生じ、正しい理解から〝楽〟が生じるのだ、と、そこまでなんとか考えたとき、それまでわたしを圧迫していた心のプレッシャーのようなものがスーッと抜けていくのがわかりました。

◉仏教の本流

また、今までどうして、自分が高い世界や低い世界の経験に対して興味を感じなかったのか、ということもわかるようになってきました。

高い世界の経験が多い者には、この世は苦しみの世界として映り、逆に低い世界の経験が多い者には、この世は喜びの世界として見える。——これは、結局『イニシエーション』で尊師がおっしゃっている〝家の引っ越しのたとえ〟と同じことでした。

つまり、この苦楽は過去の〝経験の構成〟から来る〝識別〟によるとらわれによって生じる〝錯覚〟にしかすぎないわけです。

そして、わたしが本当に見たいことは、あるいは本当に知りたいことは、そういう錯覚をすべて取り除いたときに、いったい何が見えてくるのだろうか、ということでした。そこには苦楽を超越した〝本質的な何か〟が現われてくるはずだ——それをぜひとも見てみたい。そういう欲求がわたしには強いのです。そしてそうなったときに、今いるわたしたちのこの世界（人間界）は、果たしてどのように見えてくるのだろうか？——と。

このような思いが強くなってきたある日、尊師より全サマナにある書物が配られました。『マハー・ムドラー、グルヨーガの手引き書』——この長いタイトルの書かれた一冊の本が、わたしの求めているものに対する方向性を明らかにしてくれました。

この本を読んでびっくりしたのは、マハー・ムドラーがわたしの考えていたものとは全然違っていた、ということでした。

わたしは、マハー・ムドラーをもっと〝特殊〟なものだと思っていたのです。

つまり、河の流れにたとえるならば、それは支流の一つであって、決して本流ではない。そういうイメージを持ち続けていたのですが、この本を読み進めるにつれて、これらのわたしの観念が、音を立てて崩れ去っていきました。

「マハー・ムドラーって、シャマタ・ヴィパシャナーのことだったのか！」

わたしの場合は、舎摩他毘婆舎那という言葉の方がなじみが深いのですが、仏教でいうところの〝止観〟*、つまり、マハー・ムドラーとは仏教の〝本流〟そのものだったのです。

そして、今までの日本には、それに関する抽象的な解釈書はたくさんあっても、今回尊師からいただいたような、そこへ至るためのステップを具体的に明示している指導書というのは皆無でした。

わたしは読みながら、自分が本当に求めていたのはこの本の世界だったんだ、ということがわかりました。これは、今後の修行への大きな励みになっています。

＊尊師注＝「止観」とは、一般的には瞑想のことをいうが、マハー・ムドラーは止観であるとともに現象界の中での個人のカルマの投影も含む。

◉結果を出すぞ！

結局、九二年の夏から終わりまで、アフリカ救済ツアーへの参加も含めて、ワークと修行が交互に続く生活が続きました。外から戻ってくると、それまで楽に組めていた蓮華座が組めません。そうなると修行どころではなく、まずこの苦痛との闘いでした。外に出ている時間の長さによって、痛みの抜ける時間の長さが違うのです。

わたし自身、もう修行に入ってから二年目に入ろうとしているわけで、そろそろなんとかして成就しなければ！　と真剣に考えるようになってきました。

その一つのチャンスが、年末から年始にかけての『狂気の集中修行』かな、と自分では思っていました。少なくとも、この間はワークは入らないだろうから、思いっきり修行に集中して、なんとか結果を出そう、と。

ところが、修行が始まって二、三日で師の方々の代わりに信徒さんの指導をしなければならなくなり、それはそれで貴重な経験だったのですが、やはり自分の

修行はおろそかになってしまいます。これは、やはりまだまだ長期戦なのかな、と思っていた翌日、急に第二サティアンで師を中心とした短期の極厳修行を始めるので、参加するように、という指示がありました。

そこでは、指導をしてくださる師が四人いて、蓮華座や姿勢、居眠り等を厳しくチェックしてくれます。わたしの場合は特に、ナローパ師が腰を入れることをかなりこまめに注意してくださいました。

そして尊師からは、特別に〝ヴァジラヤーナのイニシエーション〟を二回与えていただきました。

お蔭で、四日目になってすぐに究竟中にダルドリーが起き、そのことを尊師にご報告したところ、「あさって、チェンバーに入りなさい」という指示をいただいたのでした。

◉クンバカができない!

チェンバー内は、思ったよりも広く感じられ、とても落ち着いた空間、という印象を受けました。わたしは結構意識が外に向かいやすいタイプなので、リトリート修行にあこがれを抱いていたところがありました。ですから、このチェンバーはとても居心地良く感じられたのです。

また、断水断食は初めての経験でしたが、ほとんど苦を感じませんでした。

ちょうど丸一日経ったころ、インターホンを使って様子を聞いてみると、

「最初の半日はほぼ一〇〇パーセントで、後半になって安定してきていますね、九三パーセントくらいまで落ちてきています。」

という返事が返ってきました。

思ったよりも良くない数字です。よし、それでは少しプラーナーヤーマでもやってみようかな、と、スクハプールヴァカ・プラーナーヤーマを始めたのですが、クンバカが苦しくて長くできません。わたしは普通なら一呼吸七〇秒(10:40:

20）は楽に続けられます。そして調子のいいときには八四秒くらいまで延びます。ですから、これにはかなりの自信を持っていたのですが、それができませんでした。

後で聞いた話ですが、やはりチェンバーに入っていると、だんだんと二酸化炭素が増えてきます。そして、それを吸うことによって、徐々にその影響を受けてゆくので、一日経ってからなんとかしようとしても、もうそのときにはその影響が表われつつあって、本来の自分ではなくなっているんだ、ということでした。

何回かプラーナーヤーマを試みたあげく、わたしはこの方法を断念しました。あとは、なるべく心を動かさないようにして、心を停止させるように持っていこう。——そう考えて努力しているうちに二日目が過ぎてしまいました。インターホンで聞くと、ほとんど変わらず九一パーセントであると。しかも、二日間の断食断水によって体重が減少してきているという補正を加えたら、数字はもっと悪くなるだろうという話を聞いて、これはダメだと思いました。正直言って、今回

は成就は無理だな、と観念しました。ですから、これ以降最後まで数値を聞くことをやめようと心に誓いました。

このとき、実験のモニターをしていたサンジャヤ師は、持って三日くらいかな、と考えていたそうです。数値の推移からいって、そうなるパターンだったわけです。

それを尊師に報告すると、

「ずーっとワークで、六日しかまともな修行をしていないからな。」

と笑っておっしゃった後、

「本人がギブアップしない限り、数値を気にせず最後までやらせなさい！」

という指示をされたそうです。

四日に入って、初めてインターホンが鳴り、サンジャヤ師から実験の継続の確認を聞かれましたが、その背景にはこのような動きがあったのでした。わたしは異常のないことをサンジャヤ師に告げ、最後の五日目を迎えました。

◉ヴァヤヴィヤの呼吸

実は、四日目の後半から、少し呼吸がしづらいかな、という感じを受けるようになってきていました。それが、五日目に入って一気にそれが本格化したのです。呼吸が、ヴァヤヴィヤの二十五回の入出息の状態のまま延々と続くようになりました。腹筋に負担がかかりキリキリと痛み出してきました。身体をちょっと動かすと、目まいがして息が完全に上がってしまいます。とうとう鼻では息がしきれなくなり、口を使って呼吸をするようになってしまいました。

肉体的には、だんだんきつい状態になっていったものの、心は非常に落ち着いていました。全く恐怖感はありません。もし、ここで間違って死んでしまったとしたら、それは自分がその程度の運しか持っていなかったということになります。だけど、その程度の運ではハルマゲドンのときに大した役に立たないわけで、それだったら今逆にここで死んだ方が足手まといにならなくていいじゃないか、と考えたのです。——これは、わたしの〝運試しだ！〟と。

もう、成就という言葉は頭の中からすっかり消え去ってしまっていました。

そして、やはり自分は阿修羅だなと思いました。こういう極限状態にいながら、この状況を心の隅で面白がっているもう一人の自分がいるのがわかったのです。これは、めったに経験できない特殊な状況だ。それを体験できるなんて、自分はなんてラッキーなんだろう！　すべてはシュミレーションであり、エクササイズなんだ。この経験はいつか必ず役に立つ時が来るに違いない。そういって喜んでいる自分がいました。

普通は、空気中の酸素が一三・九パーセントになると、呼吸困難や筋肉のけいれんが起きるそうです。一一・五パーセントで顔面蒼白、意識不明。九・二パーセントで昏睡し、八分後には死亡する。――わたしは、最後には九・八パーセントにまで達しました。

しかし、意識ははっきりとしたままで、体調もチェンバーから出た後、三、四時間気分が悪くなっただけで、後は全く何の後遺症もありませんでした。

そして、サンジャヤ師からテストの結果を聞いたときに、尊師からのメッセージを教えていただいたのでした。

◉偉大なるグル

「成就である。二日間の経行修行の後、大阪支部へ行きなさい！」

成就！――そうか、成就と認められたのか。

うれしさがじわじわと胸に広がっていきます。しかし、なんという成就の仕方でしょう。ですが、わたしの今までの人生を振り返ってみると、この成就の仕方こそ、まさに自分にぴったりの成就の仕方だったんだということに気づくのです。

やはりグルは、すべてを承知の上でわたしを一年以上も辛抱強く修行に導き、育ててくださっていたのでした。

あれだけ否定していたダルドリー・シッディをはじめとする様々な神秘的な体

験も、今では当然のこととして受け止めている自分がいます。気がつけば、心は軽く、明るく、何の惑いもなくなっています。かつては心を覆っていたプライドも卑屈もいっさいわいてきません。それは、以前に何度も経験した〝魔境的覚醒状態〟とは全く異質のものです。成就によって得た、この心の自由さ、広がりは、今まで一度も経験したことのないものでした。

そして、わたしの子供たちとの約束は、もう親と子の約束の範囲を超え、グルへの発願、すべての魂への誓いとなって、わたしの心の中に根を下ろしているのです。

わたしは、ここでもう一度誓願しよう。

『わたしは、すべての魂のために、〝素晴らしい未来〟をもたらそう。

そのためになら、わたしはどんなことでもしてみせよう。

必要とあらば——わたしは、たとえ地獄に落ちても構わない！』

と。

グルの導きなしに、弟子の成就はありません。

この不肖の弟子を、ここまで導いてくださった、偉大なる丈夫調御者、最聖麻原彰晃尊師に心から感謝し、グルの意思される救済活動に、これからわたしの全力を尽くすことをここに誓います。どうか、グルの意思をすべての魂が実践し、本当の自由・幸福・歓喜を得ることができますように。

キミはもう尊師を聴いたか？

オウム真理教のラジオ放送

エウアンゲリオン・テス・バシレイアス

――真理の教えは全世界へのべ伝えられる

真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師の声があなたの耳を直撃！
今、オウム真理教では、日本全国に、
そして全世界に向けては英語で、毎日ラジオ放送を行なっています。
その名も「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」。
ギリシャ語で「御国の福音」という意味です。
その名に違わず、番組内容は魅力たっぷり。
ラジオから流れ出る"福音"は、きっと、あなたの心をときほぐし、
安らぎを与えてくれるでしょう。
そして、明日への新たな活力を与えてくれるに違いありません。

主な番組内容

- 真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師説法
- 麻原尊師のノストラダムス秘密の大予言
- わたしは見た！これが尊師の超越神力
- 仏典を楽しもう！

その他にも興味の尽きない内容が盛りだくさん！

日本全国どこでも AM1476kHz

22：15～1：15

英語放送（17，770kHz，17，860kHz他）

5：30～6：00，13：30～14：00

※今週の聴きどころなどを毎日紹介する便利なテレフォンサービスをぜひご利用ください。
TEL 03（5450）3602

※タイアップマガジン『えんじょい・はぴねす』定期購読受付中！

※詳しいお問い合わせは「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」係まで。
TEL 03（5450）6037

好評！ あなたとオウムをつなぐ

パソコン通信、〝オウム真理教ネット〟

オウムについてもっと詳しく知りたい……
教義その他について、
いろいろと聞きたいことがある……
オウムの人たちの生の声を聞いてみたい……
そんなあなたに最適な情報ネットワーク

オウム真理教ネット

電子掲示板
- ○最新情報！ オウム真理教
- ○尊師説法
- ○ジャータカ仏典
- ○なんでも人生相談
- ○予言・占いコーナー
- ○フリートーク

電子会議室
- ○オウム真理教ってどんなとこ？
- ○わたしの神秘体験
- ○オウム真理教のラジオ放送について
- ○ザンゲの部屋

電子メール
- ○あなたの気にいった相手に

チャット
- ○画面を通して解脱者とさあ 語ろう

フリーソフト
- ○尊師画像
- ○真理紙芝居
- ○転生うらないゲーム

などなど

〝オウム真理教ネット〟のご紹介

TEL番号	03-5300-1800（4回線） Tri-P利用可能 （CXAUMNET）
通信速度	1200/2400bps
通信条件	BIT-8 PARITY-NONE STOP-1
プロトコル	X-MODEM Y-MODEM(-G)
ゲストID	GUEST
運用時間	24時間
入会方法	ゲストログイン後、 SYSOPあてメールにて申請

面倒な手続きはいっさいありません。オウムに興味をお持ちの方、聞いてみたいことがある方は、今すぐお気軽にご利用ください。

ただ今、新入会員の方に素敵なプレゼント（「えんじょい・はぴねす」最新号）をさしあげています。

●なお、その他詳細は下記までお問い合わせください。
〒156 東京都世田谷区赤堤2-42-5
オウム真理教ネット事務局 TEL 03-5300-1805

あなたに絶対の幸福を約束する

――オウム真理教

心身の悩みを解決したい
超健康体を得たい
豊かな生活を送りたい
素晴らしい人間関係を築きたい
スーパー・パワーを身につけたい
来世も幸福に生きたい
解脱し、永遠の至福を得たい

最高の教義、最高の奥儀、そして麻原尊師のもと、すべては確実に実現します。

●オウム真理教が誇る三つの基本的修行体系

1、マハーヤーナ修行体系

現実生活をより豊かにし、幸福な人生をお約束します。ご年輩の方、仕事が忙しく時間のあまり取れない方にお勧めです。

2、タントラ・ヴァジラヤーナ修行体系

行法、イニシエーションを中心として進め、霊性を向上させて、神秘世界を実体験することができます。この修行体系を選択すれば今生で解脱し、悟ることも夢ではありません。

3、テーラヴァーダ修行体系

原始仏教の上座部仏教を再現しました。真理にのっとって清浄な日常生活を送ることによって、幸せな来世が約束されます。また、経典の記憶修習によって心の成熟が促され、悟りを得ることが可能です。オウム真理教の深遠な教義を徹底的に学びたい方に最適です。

※資料請求券を貼付けしたハガキ、または電話にて最寄りの本・支部までご連絡ください。入信案内等、詳しい資料をお送りします。

キリトリ線

神通力者への道5

資料請求券

あの名著がグレードアップ！

増補改訂版

生死を超える

麻原彰晃尊師の不朽の大ベストセラー『生死を超える』が、新しく増補改訂して登場！

麻原尊師の教えに導かれ、生死を超えて解脱した四十八名の弟子の体験談を、解脱へのプロセスに沿って掲載した。

真理の御魂（みたま） 最聖麻原彰晃尊師著

B6判 定価1800円

オウム出版 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 TEL03(3439)6043 振替 東京2-109325

麻原彰晃の世界 PART21

麻原彰晃、戦慄の予言

この恐怖の世紀末——君は生き残れるのか!?

驚異的な的中率を誇り、注目を集めてきた麻原彰晃尊師の未来予言。大反響を呼んだPART1に続いて、またもや今回、衝撃の未来予言が続々と明らかにされた。今後の大型経済不況、想像を絶する新兵器が飛び交う人類最終戦争の様相、さらにはそのさ中に登場するキリストの役割や、ユダヤ勢力、世界的秘密結社との戦い等、世紀末の地球の姿が壮大なスケールで浮き彫りとなった。動乱の世紀末を生き残りたい人には必読の一冊!

B6判 定価七七〇円

真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師

大阪支部　06(251)4264
〒541　大阪府大阪市中央区久太郎町3-2-15 マルイビル1F・B1F
堺支部　0722(21)1843
〒590　大阪府堺市海山町4-168-9
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
広島支部　082(264)7252
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
那覇支部　098 (866) 9537
〒902　沖縄県那覇市安里2-4-12 嘉数グラビアハイツ5F
深谷出張所　0485(74)8143
〒366　埼玉県深谷市萱場441-8
渋谷出張所　03(3476)5065
〒150　東京都渋谷区道玄坂1-15-3　プリメーラ道玄坂317号
若林出張所　03(3418)4147
〒154　東京都世田谷区若林1-1-2　藤和シティコープ若林602号

〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St.＃2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hügel 48, 53121 Bonn , S.R.Germany
スリランカ支部 (AUM SACCA SAṄGHA ASSOCIATION)
Horahena, Watte, Angulugaha, Galle, Sri Lanka
モスクワ支部　7-095-455-95-32
Kindergarten No.468, 32A Petrozavodskaya ul. Moscow, 125475
Russia

この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。あなたのご意見を、ぜひ下記の「『神通力者への道5』読者係」までお送りください。

〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
オウム出版「『神通力者への道5』」 読者係」

◆各道場のご案内◆

富士山総本部 0544(54)1267
〒418-01 静岡県富士宮市人穴381-1
東京総本部 03(5467)2745
〒107 東京都港区南青山7-5-12 マハーボーシャビル2・3F
世田谷道場 03(3327)8565
〒156 東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
杉並道場 03(3396)9393
〒167 東京都杉並区下井草4-4-4 井口ビル2F
札幌支部 011(241)4938
〒060 北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
仙台支部 022(268)3904
〒982 宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
水戸支部 0292(26)8044
〒310 茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
高崎支部 0273(46)1573
〒370-12 群馬県高崎市倉賀野町下稲荷前1081-5
船橋支部 0474(66)4965
〒274 千葉県船橋市新高根6-26-18
横浜支部 045(243)8079
〒231 神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢佐木長者町ビル204
金沢支部 0762(51)8457
〒920 石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
松本支部 0263(28)7429
〒399 長野県松本市芳川野溝527-3
福井支部 0776(26)6145
〒910 福井県福井市御幸3-3-41 東伸ビル2F
名古屋支部 052(252)0709
〒460 愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
京都支部 075(371)3759
〒600 京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F

神通力者への道 5

一九九三年九月二十四日　初版発行

定　価　七〇〇円
編　集　AUM PRESS
発行者　松本知子
　　石井久子
発行所　株式会社オウム
東京都世田谷区世田谷二－八－一七
郵便番号　一五四
電　話　〇三（三四三九）六〇四三
振　替　東京二－一〇九三二五

乱丁・落丁がありましたらお取り替えいたします。

© AUM Editorial Staff 1993
ISBN4－87142－085－X　C0014　P700E

神通力者への道 5

麻原尊師の愛弟子、四名の体験

ISBN4-87142-085-X C0014 P700E 定価700円（本体680円）